

## 癒しと共生の系譜 —江戸時代の感染症対応—

並松信久

〔要旨〕 本稿は江戸時代における感染症への対応について考察した。江戸時代の感染症やその対応については、すでに数多くの先行研究がある。先行研究は主に三つの分野に分かれる。医学史、幕府の対応策、文化史の三つである。本稿はこれらの先行研究をふまえて、庶民の視点から感染症と向き合う文化がどのように形成されたのかを考察した。庶民の思考や対応は、科学的な知見という点では劣っていたものの、自然観が大きく反映されたものであった。

江戸時代には庶民は感染症を科学的な根拠ではなく、体験的に皮膚感覚でとらえた。健康に対する庶民の関心は高かったため、養生概念が浸透していた。この概念が根本にあるため、感染症の対応では闘うという姿勢はなく、共生や予防という考え方が主流であった。幕府が行なった諸施策は、この庶民の考え方に沿っていなかった。医者は治療にあたったが、専門的な知識に乏しく、有効な医療が行なわれなかった。そのため庶民は寺社への祈願や護符に頼った。その祈願や護符のなかに共生の姿勢が表わされ、庶民はそれに「癒し」を求めた。しかし、この共生のバランスを崩し、混乱を引き起こしたのは、感染症を商機とみなし、それに群がるさまざまな商売の展開であった。

(キーワード傍線部分)

### 目次

- |             |          |
|-------------|----------|
| 1 はじめに      | 2 感染症と養生 |
| 3 幕府の対応と治療法 | 4 治療と護符  |
| 5 風刺と滑稽     | 6 結びにかえて |

## 1 はじめに

コロナ禍によって、人びとの暮らしが大きな影響を受けている。コロナ禍の原因は新型コロナウイルスであることが比較的早くからわかっていた。ワクチン開発も急がれ、その普及によってある程度の収束が期待されている。今回のコロナ禍ばかりでなく、感染症は長い歴史の中で、人びとの暮らしに大きな影響を与えてきた。一般に感染症は、自然を開発するとともに発生するという意味で「開発原病」といえる。人間は農耕を始めて以来、自然開発によって生存を確実にするとともに、感染症と共存してきた。感染症はすべて動物由来であるため、家畜やペットとして動物を身近に置くことで、人間は感染症から逃れられなくなった。さらに、工業化や都市化で自然開発が進み、モノが豊かになると同時に、モノとヒトの移動が盛んになって、世界中に感染症が広がっていった。<sup>(1)</sup>

たとえば、代表的な感染症にコレラがある<sup>(2)</sup>。コレラは元々インドのベンガル地方の風土病であった。1817年にカルカッタに始まり、アジア全土、ヨーロッパの一部、アフリカ、中国、ロシアの南部、朝鮮、そして日本へと広がり、約10年後の1826年に収束した。コレラは19世紀から20世紀にかけて約100年間にわたり6回の流行を繰り返した。世界中に広がったのは、資本主義の拡大や植民地の獲得競争によって、経済開発が活発となり、労働力の移動が大規模に行なわれた結果であった。コレラは日本でも幕末期から明治時代にかけて流行を繰り返したが、科学的な解明とともに、政府の対策や庶民の対応には変化がみられた。

とくに、日本におけるコレラに対する庶民の対応は興味深いものがあった。<sup>(3)</sup>1884(明治17)年にドイツのロベルト・コッホ(Heinrich Hermann Robert Koch, 1843-1910)によってコレラ菌が発見された。しかしながら、それによって庶民の多くが、即座に近代医学的な方策にしたがったわけではない。コレラという感染症の原因が明らかになってからも、なお庶民の多くは神仏に願

い続け、感染症の予防と治癒を祈った。つまり、未だ近代科学が浸透していなかったとはいえ、庶民は近代科学では心の安らぎを得られなかったようである。科学的な解明は予防と治療にとって重要であることはいうまでもないが、庶民にとっては近代科学の成果を全面的に受け入れ、それによって安寧がもたらされたというものではないようである。<sup>(4)</sup>多くの人びとが神仏に願い続けるというのは、感染症と闘うというよりも、病魔を避け、その怒りに触れないようにするという姿勢の表われである。病気の原因を神仏の祟り、あるいは前世の因果や運命と信じていたからである。わが国の寺社によって執り行われる年中行事の多くは、病魔からの守護を意味し、それを怠って病気に罹ることを怖れるために行なわれている。少なくとも庶民は感染症をやみくもに怖れるという姿勢をとっていないことはわかる。<sup>(5)</sup>

本稿では、近代科学が本格的に導入される以前である江戸時代の感染症を取り上げ、感染症に対する庶民の対応について考察していく。江戸時代を取り上げる理由は、江戸時代には西欧医学の影響がみられたものの、庶民のなかでは、それほど大きな影響がみられなかったからである。この意味で明治時代以降とは異なり、より直接的に体験的に感染症と向き合う文化が生まれたと考えられる。江戸時代の感染症およびその対応については、すでに数多くの先行研究がある。先行研究は主に医学史、幕府などによる対策、文化史などの分野に分かれている。近年の主な研究成果を列挙すると、医学史では、酒井シヅ『病が語る日本史』（談社学術文庫、2008年）；青木歳幸『江戸時代の医学一名医たちの三〇〇年』（吉川弘文館、2012年）；酒井シヅ「江戸時代の病い」（『日本歯科歴史学会誌』、第30巻2号、2013年、102～4ページ）；アン・ジャネット著／廣川和花・木曾明子訳『種痘伝来—日本の〈開国〉と知の国際ネットワーク』（岩波書店、2013年）；小山聡子『前近代日本の病気治療と呪術』（思文閣出版、2020年）、幕府などによる対策では、安藤優一郎『江戸幕府の感染症対策—なぜ「都市崩壊」を免れたのか』（集英社新書、2020年）；鈴木浩三『パンデミック VS. 江戸幕府』（日経プレミアシリーズ、2020年）、

文化史では、南和男「文久の「はしか絵」と世相」(『日本歴史』、第512号、1991年、88～106ページ)；岩下哲典「江戸より到来した歌川国芳の風刺画」(『地方史研究』、第41巻6号、1991年、81～92ページ)；H・O・ローテルムンド『疱瘡神—江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』(岩波書店、1995年)；岩下哲典「幕末風刺画における政治情報と民衆—歌川国芳「きたいな名医難病治療」にみる民衆の為政者像」(大石慎三郎編『近世日本の文化と社会』雄山閣出版、1995年、25～51ページ)；岩下哲典『権力者と江戸のくすり—人參・葡萄酒。御側の御薬』(北樹出版、1998年)；川部裕幸「疱瘡絵の文献的研究」(『日本研究(国際日本文化研究センター紀要)』、第21号、2000年、117～45ページ)；鈴木則子「江戸時代の麻疹と医療—文久二年麻疹騒動の背景を考える」(『日本医史学雑誌』、第50巻4号、2004年、501～45ページ)；氏家幹人『江戸の病』(講談社選書メチエ、2009年)；畑有紀「幕末の麻疹と食—食物本草本を中心に」(『言葉と文化』、第12号、2011年、101～18ページ)；鈴木則子『江戸の流行り病—麻疹騒動はなぜ起こったのか』(吉川弘文館、2012年)；高橋敏『江戸のコレラ騒動』(角川ソフィア文庫、2020年)；小松和彦編『禍いの大衆文化—天災・疫病・怪異』KADOKAWA、2021年；仮名垣魯文(原著)／篠原進(巻頭言)／門脇大(翻刻・現代語訳)／今井秀和・佐々木聡(解説)／周防一平・広坂朋信(注)『安政コロリ流行記—幕末江戸の感染症と流言 仮名垣魯文『安政箇疥痢流行記』翻刻・現代語訳』(白澤社、2021年)などがある。これらの研究成果以外にも多数あるが、本稿では注釈において紹介する。

本稿ではこれらの先行研究をふまえて、庶民の感染症対応という観点から、感染症と向き合う文化がどのように形成されたのかを考えていく。本稿はさまざまな文化形態を追っていくが、感染症についての新たな知見を見出そうとするものではない。本稿はもちろん科学的な発見や科学的情報の正確さを軽視するものではないが、それよりも歴史的な展開のなかで、庶民の考え方や対応がどのように変わっていったのかという点に注目していきたいと考え

ている。おそらく庶民の思考や対応は、科学的な知見という点では劣るが、自然観が大きく反映していたであろうと考えられる。というのは、前述のようにすべての感染症は動物由来であり、経済成長をともなう自然開発と密接な関係がある。言い換えれば、感染症は自然のあり方と密接に関わっているからである。もっとも、このことを客観的に知りえるのは近代以降の人びとであるが、体験的に皮膚感覚で捉えていたのは江戸時代の庶民であった。現在に至るまで感染症が拡大するたびに、自然との付き合い方を考え直さざるをえなかったことは確かであり、感染症の流行は自然と人間生活との関係を見直していくことにつながっていたと考えられる。

以下では、まず江戸時代の医療や治療法を概観し、次に神仏などの宗教や絵画をはじめ日常生活に現われた庶民の姿勢や対応について考えていくことにする。本稿では、とくに断らない限り、文中では「疫病」という言葉を使う。現在、一般に使われる「感染症」と同じ意味であるが、江戸時代の社会状況を反映している点で、疫病をという言葉を用いることにする。ただし、項目の見出しや疫病に関する説明を加えている箇所は、「感染症」という言葉を使っている。なお、引用文中には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実であることを重視して、あえて訂正を加えていない。また引用文中には読みやすくするために、句読点を一部加えた箇所がある。人物の生没年については、可能な限り記した。

## 2 感染症と養生

江戸時代には「御役三病」とよばれる三つの疫病があった。すなわち、疱瘡（天然痘）、麻疹、水疱瘡（水痘）である。いずれも一生に一度しか罹患しないものの、死亡率が非常に高かった。そのためにこれを無事に終えることが、人びとの切なる願いであった。御役とよばれたのは、幼少時に重篤化させずに軽く済ませておくことが、子供の役目と認識されていたからである。現在では予防ワクチンによって、以前ほど恐れられる病気ではなくなったものの、

江戸時代には「疱瘡は見目定め、麻疹は命定め<sup>(6)</sup>」という言葉で表わされているように恐れられた感染症であった。

疱瘡は天然痘ウイルスにより引き起こされる感染症である。飛沫感染の後、約12日間の潜伏期間を経て、高熱を發して発症する。その後、3～4日で顔・腕・足などの皮膚に発疹が生じる。発疹から少し盛り上がった丘疹から水疱へ、そして膿疱と症状が移行する。回復すると、膿疱はかさぶたとなって剥がれるが、かさぶたの跡が痘痕<sup>あばた</sup>となって残ることも多い<sup>(7)</sup>。それを苦にする人が多かったので「見目定め」とよばれた。もっとも、痘痕として顔に残るだけではなかった。膿疱期に重篤化すれば、たとえ死を免れたとしても失明する危険があった。疱瘡の流行は江戸時代において幾度も繰り返され、感染者が続出した。とくに人口密度の高い江戸では、毎年のように流行し、風土病ともいえるものになっていた。幕府は大名や幕臣に対し、疱瘡・麻疹・水疱瘡の三つのうち、いずれかに罹患した場合は、登城や儀式への参列を遠慮するよう命じたほどであった。疱瘡は一旦罹患すれば、免疫が得られ、二度と罹患しないことが経験的に知られていた。しかし、幕末に牛痘法による種痘が普及するまで、幼児のうちに軽く済ませることができるとは不確実であり、その脅威に苦しめられた。

麻疹は、麻疹ウイルスによって引き起こされる感染症である。麻疹にかかると、発熱やせきなどの症状を経て、4～5日間は全身に赤い小さな発疹が続く。疱瘡よりも感染力が強く、命を落とす危険性も高かった。死を免れても失明などの後遺症に苦しむことが多く、「命定め」と恐れられた感染症であった。麻疹が、疱瘡と異なる点は流行周期が長いことであった。20年から30年の周期で流行したため、大人になって罹患する人も多かった。流行の間隔が長かったため、治療する側の経験が乏しかったことも、麻疹の被害が拡大する要因のひとつとなった。麻疹は江戸時代を通じて14回流行した<sup>(8)</sup>。麻疹は疱瘡よりも感染力が強いため、一旦流行すると罹患者が急増した。しかし、それだけ他の感染症に比べ免疫を獲得する人も多く、逆にそれが流行周期の

長さの要因ともなった。もっとも、一旦流行すると、江戸などの人口密度の高い地域は被害が甚大となった。麻疹には疱瘡と同様、有効な治療法も薬品もなかった。そのため、麻疹が流行すると、予防や治療に関する様々な情報が入り乱れ、混乱状態となった。たとえば、麻疹に効果があるとされる食物や薬品の価格が高騰する一方で、禁忌すべき食物に関する情報も広がり、その食物の生産者は打撃を受けた。危険視された野菜では西瓜・茄子・胡瓜などがあった。また、麻疹に効果があると宣伝することによって、参詣者を増やした神社もみられた。それとは逆に、人との接触を避けることが、罹患を防ぐのに最善の対応であるとされ、芝居小屋・銭湯・髪結床などの人の集まる施設への人出は急減した。

これらの感染症以外にも、「はやり風」とよばれた流行性感冒も、庶民の生活に大きな影響をもたらした。現在においても猛威をふるうインフルエンザ<sup>(9)</sup>である。江戸時代には「風邪」「風疾」「風疫」などとよばれている。インフルエンザは、周知のようにインフルエンザ・ウイルスによって引き起こされる感染症である。感染すると高熱を発し、頭痛や関節痛などの症状が続き、とくに、高齢者は急性肺炎を引き起こし、死に至る事例が少なくない。インフルエンザは他の感染症とは異なり、江戸時代の日本では外来の感染症という特徴をもっていた（現在、インフルエンザ・ウイルスは渡り鳥によって運ばれる）。インフルエンザの伝播は、まず長崎で発症し、その後、九州・中国地方から上方を經由して関東に感染が拡がり、その後、東北へと向かうという経路をたどった。長崎から流行が始まったのは、オランダ船ないし中国（清）船によって持ち込まれたからである。とくに江戸時代後半は気温が相対的に低かったので、流行しやすい気象環境のもとで、人口が周密な江戸で猛威をふるった。流行するたびに呼び名が付けられ、1776（安永5）年に流行したのは「お駒風」、1784（天明4）年に流行したのは「谷風」とよばれた。お駒風は人気の浄瑠璃に登場する女性の名前であり、谷風は横綱である谷風梶之助<sup>(10)</sup>のしこ名が由来であった。ちなみに、谷風自身も1795（寛政7）年に流行

したインフルエンザで亡くなった。

インフルエンザと同様、外来の感染症であったコレラも、政情不安の状態にあった幕末期に大流行した。コレラは、コレラ菌を病原体とする経口感染症である。インフルエンザ・ウイルスなどは主に飛沫を介して感染するが、コレラはコレラ菌が混じった水や食物を介して感染する。感染すると、激しい下痢や嘔吐を繰り返し、脱水症状に陥る。血圧が低下し、筋肉の痙攣が起き、最悪の場合は死に至る。急性腸管感染症ともよばれ、急速に重症化し死亡することも多かったため、「三日コロリ」という異名も付けられた。前述のようにもともとコレラはインドの風土病であったが、ヨーロッパ列強、とくにイギリスのインド進出を背景に、エンデミック（一定の地域に一定の罹患率で、または一定の季節に繰り返し発生する）がエピデミック（エンデミックよりも広い範囲の地域や集団において、罹患者が予測を超えて大量に発生する）を経て、パンデミック（世界的規模で同時に流行する）となる経過をたどった。1817（文化14）年に世界的大流行となり、日本で最初に流行したのは1822（文政5）年であった。この時は西日本を中心に猛威をふるい、大坂では多数の死者が出たが、関東地方に入る前に冬となり終息した。しかし、次の1858（安政5）年の流行では、西日本はもとより関東地方でも流行した。<sup>(11)</sup>

江戸時代には多くの疫病が流行を繰り返した。これに対し、庶民はもちろん無関心ではなかった。科学的な知識や情報をもっていなかったとはいえ、生死に関わることには関心をもたざるをえず、経験的に対処法を模索した。もっとも、一般に疫病が流行した時に限らず、平常時にも医療ないし健康に対する庶民の関心は高かった。その情報の需要も大きく、それは江戸時代を通じて、数多くの養生書が大量に出版されたことに現われている。養生書が多く出回ることによって、江戸時代の庶民の医療や健康に関する根本的な考え方が形成されていった。もっとも、養生に関する思想には、いわゆる学派や流派は存在しない。庶民に対し、ゆるやかな影響がみられるだけである。<sup>(12)</sup> 養生はさまざまな意味をもつ言葉として使われるが、現在の辞書によれば、



たとえば、生命を養う、健康の増進をはかる、病気・病後の手当てをする、土木・建築物を保護する、植物に施肥などの手当てをするなどの意味がある。このなかで江戸時代には、主に健康を増進する、病気・病後の手当てをするという意味で使われた。したがって養生書とは、一般向けに病気の予防法や治療法、衛生・栄養・救急・出産・養育などに関する知識や情報が平易に書かれた書籍であるといえる。それに関連して、養生書では食事の節制、適度な運動、規則正しい日常の起居動作など、日常生活における望ましい姿も著されている。したがって養生は医療に近いものの、治療ではなく、自分で自分の健康をケアすることであるといえる<sup>(13)</sup>。

養生書は江戸時代に初めてその内容と体裁を整えたものが刊行される。1648（正保5）年頃から刊行されているが、江戸時代中期の18世紀前半期に刊行数が増加する。さらに寛政期（1789～1801年）以降に刊行数が急増し、化政期（1804～1830年）に頂点に達した。しかし、幕末期には蘭学の影響によって刊行数が減少し、近代に至って「保健衛生」の名のもとで、養生という言葉は使われなくなった。もっとも、庶民の間では養生に対する関心は続き、養生と衛生はほぼ同義ととらえられていたようである。江戸時代における養生書の刊行数の波は、疫病の流行と無縁というわけではなかったものの、庶民にとって疫病に対する治療法よりも、日常生活において経済的負担のあまりない「予防」のほうに重点があったようである。

江戸時代の主な養生書を列挙すると、貝原益軒（1630-1714、以下は益軒）の『養生訓』（1713年刊）、香月牛山（1656-1740、以下は牛山）の『(万民必用)長命養生訓』（1716年刊）、杉田玄端（1818-1889、以下は玄端）の『健全学』（1867年刊）、松本良順（1832-1907、以下は良順）の『養生法』（1864年刊）などがあった。益軒の『養生訓』は『医心方』（984年に丹波康頼（912-995）によって朝廷に献上された現存する日本最古の医書）以来の養生の所説を総合的に整理したものである<sup>(14)</sup>。牛山の『長命養生訓』は益軒を範としながら、それまでの中国一辺倒の内容から脱し、いわゆる日本化の志向を強めたものである。

玄端の『健全学』と良順の『養生法』は、蘭学の流入によって西洋医学（とくに衛生学）の影響を受けたものであった。養生書の展開は主にこのようなものであったが、江戸時代を通じて養生の基本は益軒の『養生訓』に置かれていた。養生書（ないし通俗的な実用医書）は「十八世紀以降に板行されたものだけでも、百種をこえる<sup>(15)</sup>」といわれているが、『養生訓』は庶民の間に広く普及したといわれている。しかし、普及の具体的な根拠は不明である<sup>(16)</sup>。

益軒の『養生訓』においては、養生法の最初として食養生について書かれている<sup>(17)</sup>。食べ過ぎ、飲み過ぎを戒め、楽しく食べることが推奨される。さらに身体の養生だけでなく、心の養生の重要性も説いている。むしろ身体よりも心の養生のほうを優先させている。日常の生活を律し、心のケアを重んじる生き方が説かれた<sup>(18)</sup>。そして病気を治療することよりも、むしろ病気を未然に防いで健康を維持することに重点が置かれた。病気に対しても、安易に薬に頼るのではなく、保養に努めることで治すべきと説き、自分の身体にもともと備わっている力を活かすべきことが勧められた。『養生訓』が刊行された当時の状況は、売薬が大量に出回り、庶民も競って薬を飲むようになっていた。薬の普及は医療水準を押し上げたものの、その一方で、薬への依存と乱用による弊害も社会問題化し始めていた<sup>(19)</sup>。むしろ薬害に危機感をもった医師もいたが、益軒もそのひとりであった。益軒は病の災より薬の災のほうが多いと語る。薬を飲まなくても、自然と治癒する病気は多いと考えていたからである。益軒はみだりに薬を用いれば病状が逆に悪化してしまい、死に至る事例も多いので、薬を用いるのは慎重でなければならないと説いている<sup>(20)</sup>。

時代は少し下るが、幕末期に益軒と類似の思想が、蘭学によってもたらされた。幕末期の養生書である平野重誠『病家須知』（1832（天保3）年）には、むやみに薬を使わずに、「すべて病で熱が出、腫瘍で膿をもつのも、みな身体の元気がその病毒を追い払い、体外へ排除しようとする」という「自然作用力」（テンネンノハタラキ）を生かすという考えが示された<sup>(21)</sup>。この発想は中国医書にもある。しかし、治療という点から、現代中医学には自然作用力やそれに

類似の概念はみあたらない。したがって、この概念は日本の鍼灸治療における固有の概念といえなくもないが、これはもともと日本にあった概念ではなく、幕末期の蘭学の影響を受けたものと考えられる<sup>(22)</sup>。当時のオランダやドイツの医療は、自然治癒力思想に立つ医学体系を構築した古代ヒポクラテス(BC460-370)の系譜を受け継いでいた。ヒポクラテスの自然治癒力思想は、19世紀に細菌病理説が出ることによって衰えたが、欧米の医療の根底に連続と流れていた。この点で、日本の養生と蘭学の治療とはもともと矛盾するものでなく、むしろ基本部分において共通面をもっていたといえる。

もっとも、ヒポクラテス思想と古代中国では、人間に内在する自然治癒力という点では共通していた。中国では、治癒する力を「正気」、病気の原因であり結果である否定的な力を「邪気」と定義していた。そして治癒とは正気が邪気を倒すことを意味した。この考え方が現代中医学に引き継がれる「邪正闘争」という概念を生み出す。これに対しヒポクラテス思想では、「邪気」として否定的に位置付けられる発熱や下痢などの症状を、生きようとする生命の働きであり、それが発現することによって、病は癒えるとして肯定的に位置付ける。否定的に感じられがちな病気や症状に、生命の肯定的な働きをみる。このヒポクラテス思想は、江戸時代初期の打鍼流派の奥義書にある「邪正一如」という概念と類似である<sup>(23)</sup>。邪正一如はもともと密教の経典や神仏混交の山岳宗教、修験道の祭文などにみえる宗教用語であった。正気と邪気を対立させない考え方であり、邪正は相対的な関係であるとする。鍼を打ち込むことで、邪気はおのずから正気にかえり、本来の正道において働くようになる。このような邪正一如観がヒポクラテス的な自然治癒力の受け皿になっていた可能性もある。庶民は養生という概念を通して、邪正一如観の影響を受けていたといえるのかもしれない。

### 3 幕府の対応と治療法

疫病の流行に際し、幕府は対応を迫られた。1708（宝永5）年秋から翌年にかけて麻疹が流行し、5代将軍徳川綱吉（1646-1709、以下は綱吉）は麻疹によって命を落とした。この年の麻疹流行は畿内で始まった。河内屋可正（1636-1713）の記録『河内屋年代記』には「当年七月より京・大坂ハシカハやる。大和・河内・和泉・伊勢・伊賀、凡日本国中小児女ノ分、無不病之。古今奇代ノ疾病トソ。大坂ナトニハ死者尤多シ。在所ハ廿人ニ壺人程死<sup>(24)</sup>」と記されている。牛山の著書『牛山活套<sup>ぎゅうざんかつとう</sup>』においても「日本六十余州ヲシナメテ麻疹流行シテ、男女老少ヲ不問、一般ノ疫麻也、貴トナク賤トナク此患ニテ死スル者多シ<sup>(25)</sup>」と記されている。全国的な流行であり、男女老若の区別なく、身分の高下に関わりなく多くの病人が亡くなったとされる。

当時の麻疹治療については、『牛山活套』において、牛山が自ら京都で行なった治療記録を残している<sup>(26)</sup>。その著書の「麻疹」の項は、本文記事と補遺とで構成され、本文は自序の書かれた1699（元禄12）年までに執筆されていることから、1690（元禄3）年の麻疹流行の記述であると考えられる。補遺は1708（宝永5）年の京都での治療経験に基づく追記である。同年の麻疹流行では、牛山は530人余の患者を診た。牛山は多数の患者を診察し、患者のなかからひとりも死者を出さなかったようである。しかし、この流行時には多くの死者が出ており、その理由を牛山は医者の治療法の誤りに求めている。1699（元禄12）年に書かれた本文でも、麻疹は疱瘡に比べ軽い病気であるにもかかわらず、急性の病で治療法が少なく、さらに治療を誤ると病状が急変すると説明している。

このような状況のなかで綱吉の麻疹治療については、その中心は医師団によって行なわれたが、それと同時に祈祷僧から祈祷を受けていた。とくに綱吉の護持僧であった隆光（1649-1724）が中心となって祈祷が行なわれた。祈祷は、当初は麻疹にならない祈祷、そして麻疹になってからは、早く本復す

るための祈祷が行なわれた。その祈祷内容については、綱吉自身や側近の柳沢吉保(1658-1714)から指示が出され、医師の診断を参考にしたものであった。<sup>(27)</sup>また祈祷と同様、儀式や習慣の類も重視された。たとえば、麻疹の快気祝いの儀式である酒湯の式が重視され、とくに將軍の酒湯は、単なる快気祝いの意味を超えた意味をもっていた。<sup>(28)</sup>酒湯の式は一度だけでなく、最初の酒湯を一番湯とよび、日をあけて二番湯、三番湯が行なわれた。その日取りには身分や家、地域によって多少の違いがあったものの、天皇から將軍、そして庶民にまで広く行なわれた習慣であった。もともと、酒湯の式には儀礼としての意義とともに、実質的な意味もあった。3回にもわたる酒湯の式は、まさに患者隔離期間の指標として機能していた。

庶民の酒湯については、『河内屋年代記』に記述がみられる。<sup>(29)</sup>宝永期(1704～1711年)の麻疹流行時には、酒湯の習慣は少なくとも上方の庶民の間では広がっていた。しかし、1708(宝永5)年の麻疹流行時には「湯ヲカクル者死」という噂が広まり、これをきっかけに庶民の酒湯は行なわれなくなる。もともと、酒湯の習慣がこれで衰えたわけではなく、疱瘡については酒湯が近代以降もなお行なわれている。幕末期の1824(文政7)年刊の葛飾蘆菴『麻疹必用：一名痘疹年代記』には、巻末の「痘疹必用」という疱瘡の養生について記した部分で、疱瘡の「酒湯の仕方」について説明している(しかし、麻疹の酒湯には触れていない)<sup>(30)</sup>。おそらく庶民の間では麻疹の場合の酒湯はなくなっていたと考えられる。麻疹の酒湯習慣が衰退した背景のひとつは、麻疹が治っても、その後しばらくは湯(入浴)を禁ずることが広がったことにあった。江戸時代最後の麻疹の流行である1862(文久2)年には、50日間もしくは75日間にわたって入浴が禁じられた。

一方、1709(宝永6)には疱瘡が流行し、京都では中御門天皇(1702-1737)や東山上皇(1687-1709)が感染した。天皇は回復したが、上皇は崩御した。疱瘡は1711(正徳元)年から翌年にかけて流行し、多くの死者を出している。この疱瘡流行も含めて、享保改革(1716～1745年)がはじまる10年ほど前

から、疫病の流行が繰り返し起こった。そのために8代将軍徳川吉宗（1684-1751、以下は吉宗）は、医療に力を入れた。将軍が施す仁政という意識のもとで、疫病に効果のある薬の情報や治療法などの医療情報などが積極的に提供された<sup>(31)</sup>。吉宗は1716（享保元）年に将軍の座に就くが、この年も疫病（病名は不明）が流行し、江戸では1ヶ月で死者が8万人を超えたとされている<sup>(32)</sup>。1721（享保6）年と1724（享保9）年にも疱瘡が流行した。幕府は1729（享保14）年に丹羽正伯（1691-1756、以下は正伯）と林良適（1695-1731）に対して『普救類方』（1729年刊）の編纂を命じた。同書は庶民にも入手可能な薬や簡単な治療法を紹介したものである<sup>(33)</sup>。これには疱瘡の治療法もおさめられ、疱瘡の対策にもなった。さらに1733（享保18）年に幕府は正伯と望月三英（1697-1769）に疫病への処方として『救民薬方』をまとめさせ、幕領に配布した<sup>(34)</sup>。これは平易な文章で具体的な病状と処方が11箇条にわたって書かれた小冊子である（全体で約20ページ）。たとえば、疫病のため高熱を發した時は、芭蕉の根を砕いて搾った汁を飲むのがよい。食中毒になった時は、煎った塩を舐め、あるいは温い湯にかき混ぜて食べるのがよい。口や鼻から出血した時は、ねぎを刻んで水1合で煎じ、冷やして何度でも飲むのがよいなどであった。芭蕉・塩・ねぎなど、庶民が比較的入手しやすいものを材料としてあげていることに、その特徴が現われている<sup>(35)</sup>。

幕府は、『普救類方』（疱瘡の治療法は記しているものの、麻疹については記していない）や『救民薬方』といった処方箋の編纂や配付だけでなく、実際に薬を支給した。1730（享保15）年に再び麻疹が流行し、江戸の町奉行所は麻疹の治療薬とされた「白牛洞」<sup>はくぎゅうどう</sup>を無料で配布する触れを發した<sup>(36)</sup>。幕府は安房国（千葉県南部）に嶺岡牧<sup>みねおかのまき</sup>という名の牧場をもっていた。そこで吉宗はオランダを通じて輸入した白牛を繁殖させていた。そして搾った牛乳に砂糖を入れて煮詰めた「白牛酪」<sup>はくぎゅうらく</sup>を作っていた。白牛酪は疲労回復のほか、解熱にも効果があるとされた。嶺岡牧で放牧されていた白牛の糞で作られたのが白牛洞<sup>(37)</sup>であった。

1730（享保15）年に引き続き、翌1731（享保16）年にも麻疹が流行し、吉宗の後継の徳川家重（1711-1761、以下は家重、9代將軍職に就くのは1745（延享2）年）が罹患した。家重は回復するものの、当時の尾張藩主の徳川継友（1692-1731）は麻疹のため亡くなった。幕府の中樞でもこのような状況であったので、庶民は幕府の勧める薬に対し、あまり期待していなかったようである。町人は白牛洞を貰いに町奉行所まで行かなかった。そこで町奉行所は、町年寄のもとに出向けば貰えると触れを出したものの、依然として町人は少なかったようである。この状況に対し町奉行所は、自宅でする白牛洞の作り方を触れるという策をとった。しかし、このような策をとっても治療薬の人気は芳しくなく、その効果も不明であった。もっとも、それ以上に町人は「施し」を受ける必要は感じていなかった。1733（享保18）年に町奉行所が行なった調査によれば、町人46～7万人のうち、30万人余は自分で薬を購入できる経済的な余裕があったとされる<sup>(38)</sup>。つまり、町人の4分の3は薬を貰う必要がなかった。

それよりも経済的余裕のない10万人余の町人の動向が注目されるが、薬効を疑っていることが、施しを受けない理由なのかどうかは明らかでない。江戸の町人を男女別にみると、男性が約30万人、女性が約15万であった。男性が女性のほぼ倍であり、その多くは独身者であった。こういった状況が疫病流行の原因のひとつであると同時に、経済力のない独身者の多くは、否応なく自然治癒力に頼らざるをえない状態であったと考えられる。もっとも、このような状態の江戸と異なり、京都では有料の麻疹薬の販売が盛況をみせた。藤拙斐『麻疹気候録』（1776（安永5）年刊）によれば、1730（享保15）年の流行の際、京都の薬屋は麻疹が治った後養生のために飲む「霜台散」という薬を売り出したところ、莫大な利益を得たと記されている<sup>(40)</sup>。江戸と比べ京都は相対的に医療先進地であったといえなくもないが、薬は有料のほうが庶民は関心をもったという現象は興味深い点である<sup>(41)</sup>。

享保の改革の一環として、1722（享保7）年に幕府は養生所開設の町触を

出した。<sup>(42)</sup>当初、診療や入所を希望する者は多いと予想されたが、実際は予想をはるかに下回った。原因は人体実験場ではないか、あるいは粗末な薬を使用しているという、養生所に対する悪評が広まったためであるとされる。確かに新たな試みに対する庶民の不安感が反映されていたのかもしれないが、上記の薬の支給と同様、無償に対する精神的な抵抗感もあったのではないかと考えられる。翌 1723 (享保 8) 年に町奉行所は町名主を養生所に集め、養生所に関する風評は事実無根であり、町内に病人がいれば早速養生所に連れてくるようにと言いつ渡した。<sup>(43)</sup>とくに町奉行所は費用の支払いについて強く否定し、無償であることを強調した。

入所については名主側にも問題があった。たとえ養生所での診察や入所を希望する病人が町内にいたとしても、町奉行所への届け出や手続きが面倒であったため、名主はそれを避けたようである。当時の名主の数は約 250 名であった。それに対して町数は 1,600 町を超え、町方の人口は 40 万人を超えていた。すなわち、名主 1 人あたり平均 7～8 町、約 1,500 人の町人を対象にしていた。実際には手が回らなかったのかもしれない。しかし、この状況に対し町奉行所は、名主側の手続き放置行為を禁止するとともに、入所手続きを簡略化する旨の町触を出している。<sup>(44)</sup>入所希望者が町奉行所に願い出る手続きを不要とし、誰かひとり付き添って、名主の印が捺された書面を養生所に持参すれば、吟味の上、入所を認めるとした。これによって名主の負担は軽減されたのかもしれないが、名主側は自らの町内管理責任を問われるおそれもあると考え、なるべく町内で問題解決を図ろうとした。もっとも、悪評の払拭と入所手続きの簡略化は功を奏したようであり、養生所の入所希望者は増加し、これに対し新たに病室の増築や入所期間の制限が実施された。<sup>(45)</sup>

1753 (宝暦 3) 年に江戸で麻疹が流行した。町名主の斎藤月岑 (1804-1878、以下は月岑) の『武江年表』には「四月より九月麻疹流行、多く死す」と記されているが、同年に『麻疹日用』という書籍が刊行されている。同書は、それまで麻疹については疱瘡の末尾に簡単に記すに過ぎなかった書籍とは異



なり、麻疹を単独で扱った初めての書籍であった。その18年後の1771（明和8）年に橘尚賢（1724-1794）による『麻疹精要方』という麻疹に関する書籍が刊行される<sup>(47)</sup>。同書は1731（享保16）年に上月専庵（1704-1752、大坂の医師）が編纂した『麻疹精要』に薬方の解説を加えたものであった<sup>(48)</sup>。『麻疹精要』は、中国の張璐玉が著した『張氏医通』（1695年刊）のなかの「嬰兒門」（小児科）における麻疹の部分抜き出して、訓点を付けて出版したものであった。『張氏医通』に対する当時の医療界の評価は高かったが、訓点なしでは読みこなせない医者のために、『麻疹精要』が刊行された。そして、それさえ使いこなせない医者あるいは初心者の便宜のために書かれたのが『麻疹精要方』であった。さらに1824（文政7）年には『麻疹精要國字解』という『麻疹精要』の口語訳（左々井茂庵訳）まで刊行されている<sup>(49)</sup>。麻疹に関する治療法は、初心者はおろか、素人でも使いこなせるものになった。科学的な真偽はともかく、治療法に関する関心の高まりがわかると同時に、医者と素人の知的レベルはあまり変わらなくなったと考えられる。

前述のように、麻疹は20～30年間隔で流行する傾向がみられたが、1776（安永5）にも麻疹が流行った。10代將軍徳川家治（1737-1786）の時であった。『武江年表』は「三月末より秋の始めまで麻疹流行、人多く死す」と記している<sup>(50)</sup>。江戸の町触によると將軍の日光社参詣の後には、その祝儀として町人の「御能拝見」が行なわれることになっていた。しかし、この麻疹の流行によって、幕府は出席する町人が少なく、能会が成立しないのではないかと危惧した。そこで江戸の町年寄の奈良屋に、各町の状況を調べるよう命じている。奈良屋の回答は、病人や看病人を除いても人数が減ることはないというものであり、幕府の心配は杞憂に終わった<sup>(51)</sup>。

その約27年後の1803（享和3）年にも麻疹が流行した。今回の麻疹は江戸・京都・大坂・名古屋でほぼ同時であった。江戸では4月から6月にかけて感染者が増加し、麻疹流行を受けて、麻疹に効くとされた薬や食物の価格が高騰した。町奉行所は薬種商に対し、麻疹治療に処方する薬種に関し、適正価

格で販売するよう命じ、その価格表を店先に貼り出させた。さらに薬と同様に、麻疹に効くとされた野菜や乾物の高騰を受け、通常価格に戻すよう命じる町触も出された。<sup>(52)</sup> その一方で、麻疹の流行で打撃を受けた商売も多かった。式亭三馬（1776-1822、以下は三馬）の『麻疹戯言』（1803年刊）によれば、麻疹流行で打撃を受けた商売は、芝居小屋・鰻屋・煮売屋・蕎麦屋・風呂屋・髪結床・遊郭などであった。<sup>(53)</sup> 三馬は「疱瘡は見目定め、麻疹は命定め」ということわざに対し、実際には麻疹は軽い病で命定めでなく、疱瘡こそ命定めというべきであると述べている。麻疹による経済的混乱は大きかったものの、三馬はその混乱に比べて、麻疹の犠牲者が少ないと感じたようである。そして、町会所による経済救済が始まった（前年の1802（享和2）年に流行ったインフルエンザにも同様の措置がとられた）。救済対象は自分もしくは家族が感染し、生活困難に陥った者だけに限定された。名主は各戸の麻疹感染者の有無を調査し、該当者の名前を報告しているが、その数は約4万人にのぼった。<sup>(54)</sup>

それから約20年後の1823（文政6）年にも麻疹は流行するが、これは全般的に軽く済んだようである。その約13年後（周期が通常よりも早い）の1836（天保7）年と、またその約26年後の1862（文久2）年に、江戸で麻疹が流行した。両年の流行は長崎の出島に停泊した船から感染し、全国へと広がったものであった。1862（文久2）年の流行は江戸城内でも感染者を出し、14代将軍徳川家茂（1846-1866）と正室和宮（1846-1877）も感染したが、快癒した。『武江年表』によれば、1858（安政5）年のコレラ流行時の倍の死者数であったとしている。また須藤由蔵（1793-?）の諸事記録である『藤岡屋日記』によれば、6月から8月の江戸市中の死亡者は14,210人で、「暴瀉病」（コレラ）その他による死亡者数は6,742人であった（この年はコレラも流行した）。<sup>(55)</sup> 江戸の人口約50万人とすると、その約4%が麻疹あるいはコレラで死亡したことになる。この時には入浴・月代・房事（性交）・音曲・酒・魚・野菜・果物・蕎麦などが、病中だけでなく病後も「後養生」として49日間、時には100日間控えるほうが良いとする禁忌が広まった。これらの禁忌を守らない

と麻疹が再発し、さまざまな後遺症に悩まされるという情報が、養生書や麻疹絵と称される錦絵などを通じて広まった（詳しくは後述）。そのために禁忌に触れる銭湯／髪結床・遊郭・酒屋・魚屋・蕎麦屋などの商売が成り立たなくなり、盛り場をはじめとして経済活動は停滞した。もっとも、医者と薬屋は繁盛し、麻疹薬や麻疹に効くとされる食物の価格が高騰し、経済混乱を招いた。こういった事態を受け、町会所では臨時御救を実施し、生活支援のため御救米を給付している。また、豪商による施行も広く行なわれた。<sup>(56)</sup>

一方、御役三病の疫病でないものの、インフルエンザの流行もあった。1802（享和2）年に江戸でインフルエンザが大流行したが、オランダ船や中国船が入港する長崎から九州を経て、上方に流行が飛び火し、京都では2～3月頃に流行した。この時のインフルエンザは「アンボン風」「お七風」などとよばれた。アンボン風は1801（享和元）年に漂着した外国人漂流民の名前とされるアンボンにちなんだ呼び名であり、アンボンが感染源と考えられたからである。お七風の呼び名は、当時、八百屋お七の小唄が流行ったことに由来している。曲亭馬琴（1767-1848）は『兎園小説』（1824年刊）において、流行したインフルエンザを振り返り、「世俗の名」（異名）とその命名の由来を記している。<sup>(57)</sup> こういった名が付けられたのは、疫病と小唄などが同じ流行り物であったと同時に、亡くなった故人を悼み懐かしむためでもあったという。インフルエンザの流行は、生活基盤が脆弱な庶民ほど、その影響が大きく、短期間のうちに大量の窮民を生み出した。町奉行所は1793（寛政5）年の類焼御救の前例にならい、生活基盤が脆弱な「其の日稼ぎ」の者への救済を決めた。<sup>(58)</sup> もっとも、この時は病気の有無などを選別基準にしなかった。何も条件を付けず、其の日稼ぎの者すべてを救済対象にした。各戸別に感染者の有無を調査していたのでは、該当者の報告に時間がかかってしまうと考えられたためであった。町名主を経由することによって、前述の小石川養生所のように、調査に手間取ってしまう。手間取っている間に、窮民の経済状況がさらに悪化してしまうと予想したからであった。

町奉行所は其の日稼ぎの者を例示している<sup>(59)</sup>。すなわち、棒手振り、日雇稼ぎの者、其の日暮らしの者、其の日の手間賃だけで家族を養っている職人（左官・大工・車力・元結職など）などであった。この対象者に対し、給付額が独身者には300文、2人暮らし以上の者には1人あたり250文が、疫病が収束するまでの当座の生活費として給付された。名主から其の日稼ぎの者と認定されれば、一律に給付された。この時の救済費は総額73,094貫余であった。公定相場（1両＝4貫文）で換算すると、約1万8千両である。これは町会所が江戸から徴収した年間の積立金額に匹敵する。町奉行所は当初、給付対象者は約25万人と見積もっていた。つまり、約50万人の町人の半分と概算していたが、各町から報告された総計は、それを上回り約29万人にのぼった。

約20年後の1821（文政4）年に再びインフルエンザが流行した。この時は上方から関東甲信越に拡がった。江戸では2～3月に感染者が急増した。町会所は臨時御救をし、給付額は前回の流行時と同額にした。流行収束までの生活費となることが期待された。其の日稼ぎの者の数は約30万人にのぼり、前回の流行時より約8千人多かった。給付金の総額は、約75,035貫文であった<sup>(60)</sup>。さらに1830（文政13）年にもインフルエンザが流行し、臨時御救が実施された。もっとも、前回までは銭であったが、この時は米で給付された。約31万人の其の日稼ぎの者に対し、10日分の飯米として白米11,467石余が給付された<sup>(61)</sup>。この時に使われた町会所の備蓄米については、次のような計画で買入れが進められた。江戸の人口約50万人のうち、半分の25万人を救済が必要な者とみなす。その2ヶ月分の飯米を用意するため、白米67,500石の備蓄をめざす。男性の1日あたりの飯米は5合、女性と子供は3合とする。この計画に沿って、町会所は積金を原資として米穀を買入れた<sup>(62)</sup>。文化・文政期（1804～1830年）は米価が下落したこともあり、米穀の買入れには好都合な状況であり、備蓄は円滑に進んだ。1851（嘉永4）年にもインフルエンザが流行し、臨時御救が実施された。其の日稼ぎの者約38万人に対して、白米約1万5千石が給付された。1854（嘉永7）年にもインフルエンザが流行し、こ

の時はペリー (Matthew Calbraith Perry, 1794-1858) が江戸湾に再来航した年であったため、「アメリカ風」とよばれた。

インフルエンザと同様、大きな影響を及ぼしたのはコレラであった。明治維新の約 10 年前の 1858 (安政 5) 年にコレラが大流行した。前述のように日本で最初にコレラが流行したのは、その約 35 年前の 1822 (文政 5) 年であった。九州や中四国を中心に多数の感染者が出たが、冬の到来とともに、現在の静岡県沼津が東限となり、江戸では流行しなかった。しかし 1858 (安政 5) 年のコレラは江戸でも大流行した。その前年から世界的に 3 回目の流行がはじまり、東南アジアや中国では感染者が増加し、日本にも伝播し長崎からもち込まれた。長崎に入港したアメリカ軍艦ミシシッピ号の乗務員のなかに感染者がいた。そのため長崎では感染者が急増し、人口約 6 万人のうち 1,583 人が発症し、そのうち 767 人が死亡した。

長崎奉行所はオランダ軍医ポンペ (Johannes L. C. Pompe van Meerdervoort, 1829-1908) のアドバイスをもとに、コレラの予防法を町人に布告し、生ものを禁じ、海産物・野菜・果物などの食用を禁じ、生水を飲むことを禁じた。医学伝習所を臨時の治療施設にする旨も布告された。治療薬はキニーネとアヘンが用いられた。1858 (安政 5) 年 7 月には治療と予防が功を奏し、流行は下火となった。医学伝習所の治療がコレラの鎮静化に貢献したことで、ポンペがかねてから要請していた病院の設置が 1859 (安政 6) 年 8 月に決まった。ただし、その名称は養生所であった。おそらく病院では具体的なイメージが湧かないので、すでに認知されていた養生所という名称にしたようである。そして 1861 (文久元) 年 8 月に長崎に養生所と併設の医学所が設立される。長崎養生所の誕生であった。<sup>(64)</sup>

1858 (安政 5) 年 7 月に長崎ではコレラは沈静化したが、同じ 7 月に江戸で感染者が出た。とくに江戸湾沿いの町で感染者が増加し、水を通じて感染が広がった。8 月に入ると江戸全体に蔓延し、とくに井戸を共有していた長屋住まいの者が感染するリスクが高かった。この時のコレラの死者数は、『武

江年表』によれば、8月1日から9月末までの累計として28,000余人とされ、そのうち火葬されたのが9,900余人であった<sup>(65)</sup>。コレラの特徴は、「三日コロリ」と称されたように、発症から死に至るまでの期間が短く、死亡率の高いことであった。

江戸幕府はコレラ蔓延に対し、身体を冷やさないよう促すとともに、りゅうがんにく竜眼肉と生姜で調合した芳香散を治療薬として勧める町触を出すとともに、町会所に臨時御救を実施させた<sup>(66)</sup>。約523,000人に対して白米24,000石余を給付したので、其の日稼ぎの者という枠に限定せず、町人ほぼ全員を対象としていたことになる。コレラは9月に入ると下火になり、10月には沈静化した。しかしながら、コレラで著名な文化人が命を落とした。たとえば、浮世絵師の初代歌川広重(1797-1858)、戯作者の山東京山(1769-1858、山東京伝の弟)、浄瑠璃語りの三世清元延寿太夫(1822-1858)らであった。コレラは1858(安政5)年に一旦収束したものの、翌1859(安政6)年の7～9月に再流行し、多数の死者を出している。

#### 4 治療と護符

疫病に限らず、病気に罹った時にまず頼ったのは、医者と薬であった。しかし、医者や薬が万全なものであったとは言い難い。科学的な是非は置くにしても、医療体制に問題があった。たとえば、1776(安永5)年の麻疹流行時の治療について、大坂の医者であった那賀山章元は1799(寛政11)年刊の著書『麻疹要論』で、医療体制を批判している。この著書によれば、麻疹は24～5年おきに流行るので、間隔があきすぎて医者は治療法を心得ていない。流行に直面すると「俄ニ諸書ノ卷末ニアル、ザツトシタル杜撰ノ考ヤ、麻疹精要ヲけみし閱テ治方ヲ下ス<sup>(67)</sup>」と記している。めったに遭遇しない流行に直面した医者は、慌てて関連書籍の簡単な記載をみるか、あるいは、前述の『麻疹精要』を読んで済ませるかという程度の知識で治療に臨んだ。とくに中国の医書を読みこなせない医者のために、多数の諺解本(注釈書)も出された。養生書

や浮世草子などにも、漢文が読めず和文の入門的医書で学んだ程度の水準の医者が、「庸医」や「藪医者」という蔑称で登場する。庶民がかかる医者<sup>(68)</sup>の多くは、この庸医であった。

1778(安永7)年に刊行された大倉勝雲の著書『麻疹一哈』は、麻疹に関する安易な治療と禁忌の広がり<sup>(69)</sup>を厳しく批判している。とくに禁忌に関して、中国の小児科医書『保赤全書』を批判する形で、世間に流布する禁忌を否定している。『保赤全書』は麻疹の飲食禁忌に関して、疱瘡よりも厳重に守らなければならないとしていたが、『麻疹一哈』は適切な薬で体内のウイルスが尽きていけば、麻疹が治った後に、飲食によって症状が出ることはないとしている。しかし、これは逆にいえば、麻疹禁忌が実際に行なわれていることを意味した。庶民にとって麻疹に関する情報を手に入れる手段は、篤志家によって広く無料で配られた薬や禁忌に関するリストであった。庶民はこのリストに頼るか、あるいは口コミによって麻疹の対処法を模索するしかなかった。こうして庶民は必然的に禁忌を守ろうとした。さらに庸医による医療の横行によって、禁忌の拡大が助長された。医者は書籍を通じて禁忌の情報を集め、病人に書籍通りに長期間の禁忌を強いた。麻疹禁忌が養生に不可欠な事柄になるにしたがい、病人のほうも医者<sup>(70)</sup>に禁忌に関する詳細な助言を求めた。そこで医者はますます禁忌に関する知識が必要となっていくた。この傾向は1803(享和3)年の麻疹流行時に顕著となり、禁忌の是非をめぐって後世派と古方派を中心に論争が行なわれるほどであった。

1823(文政6)年の麻疹流行は全般的に軽く済んだものの、一般向けの麻疹養生書は多く刊行された。この時期に庶民を対象にした禁忌情報が市場化され始めた。麻疹養生書が求められた背景には、医者にかからず売薬で治す場合が多かったこと、人びとの医者に対する不信感があったこと、よりよい医療<sup>(71)</sup>を選択するための基礎知識を求めたこと、などが考えられる。前述の1824(文政7)年に刊行された『麻疹必用：一名痘疹年代記』は、「多年養生の書を兼而著述」してきた葛飾蘆菴によって著され、一般向け麻疹養生書は、

いわゆる養生書の延長上に位置付けられた。同書には麻疹年表、疹の出方による麻疹の軽重の判断法、病因論、薬の選択法、良医の選び方、禁忌などの麻疹に関する情報がまとめられている<sup>(72)</sup>。同書の「食してよきもの」のリストの最後には、「若病人強而好む物あらバ、医師に問ふべし」と記されている。罹患者の質問に答えるために、医者<sup>(73)</sup>が禁忌情報を蒐集する必要があった。病人のほう<sup>(73)</sup>が一般向けの麻疹書を読んで情報を蓄え、その上で医者<sup>(73)</sup>に細かい質問をする。それに答えるために、医者<sup>(73)</sup>はより詳しい具体的な禁忌食物に関する情報を書籍に求めた。さらに同書では麻疹は流行周期が長いので、老医者といえども治療経験が少なく、病人は注意しなければならないと促している。適切な治療を受けるには、病人のほうも、ある程度の知識をもつ必要があった。

1824（文政7）年には重田貞一（十返舎一九）『麻疹養生傳』が刊行されている。この書籍も麻疹の薬・呪い・禁忌を網羅した一般向けの麻疹養生書であった<sup>(74)</sup>。麻疹療養中は「肥だちかかりて腹たつこと、かなしむことすべて気をつかふことあし、只人と雑談をなし、草紙などよみて退屈せざるがよし」と、不安に思うことを避け、雑談や読書を楽しむことを勧めている。同書の最終頁には十返舎一九（1765-1831、以下は十返舎）による『西国麻疹雑談』と『右之通麻疹に寿福請取帳』という2冊の麻疹を扱った戯作の宣伝が掲載され、後者の宣伝文には「はしかのことをおもしろおかしく書つづりたるなれハ、麻疹の御見舞いによき絵ざうしなり」と記されているが、麻疹養生書は麻疹の見舞品としても使われた。6～7年おきに流行する疱瘡は病人のほとんどが幼児であったために、見舞品は絵や玩具に限定されたが、約20年周期の麻疹は大人の病人も多かったことから読本類が使われた（詳しくは後述）。

玉石混淆の医者と多種の売薬、巷に飛び交う禁忌情報の中で、江戸の人びとは試行錯誤を繰り返し、自ら最善と思われる方法を求め続けた。麻疹をめぐる社会的混乱は、麻疹薬となる生薬が軒並み高騰するなど、医薬に依存する社会のあり様と、麻疹関連商売の拡大によってもたらされた。しかし、人びとは医者や薬だけに頼っていたわけではない。寺社に祈願するなど宗教的



ないし呪術的な手法も取り入れて治癒を願った。この点で医者だけでなく、宗教家・呪術師・修験者・占い師なども施療者であったといえる。祈祷やお祓い、呪いなどの形で広く治療が行なわれた。病気のとらえ方も多様で、神仏による罰、疫神の仕業、呪詛、あるいは死霊の憑依などに病因が求められることも多かった。そのため宗教的・呪術的な治療法も多く受け入れられた。<sup>(75)</sup>

疫病は疫神の仕業と信じられていた側面をもっていた。疫神が憑りつくことで罹患すると考えられたため、憑りつかれないよう、その対応策に工夫が施された。それは単に疫神を撃退するのではなく、祀って丁重に送り出すことで、その疫病から逃れるという方法であった。言い換えれば、疫神にお引き取りを願ったわけである。この疫神送りの行事は全国的に広く執り行なわれていた。たとえば、疫病の流行を受けて平安時代前期に始まった祭りである京都の祇園祭（祇園御霊会）が代表的なものである。当時、京都をはじめ全国各地で疫病が流行した。さらに富士山の噴火や地震津波などの天変地異も相次いでいた。そこで、大内裏の南にあった神泉苑に66本の鉾を立てて、祇園の神を祀った上で、神輿を送って災厄の除去を祈った。<sup>(76)</sup> 祇園祭は祇園御霊会ともよばれたように、疫神や死者の怨霊を鎮めて宥めるために執り行なわれた御霊会のひとつであった。疫神送りもその流れを汲む風習であった。疱瘡の場合には、疱瘡神に憑りつかれることで罹患すると考えられていたので、疱瘡神を祀って送り出すことで、その病魔から逃れようとした。たとえ罹患しても、軽く済むよう祈った。<sup>(77)</sup>

さらに、疱瘡神は赤を好むとされる一方で、赤は魔除けの色でもあり、忌み嫌うとも考えられていた。<sup>(78)</sup> そこで疱瘡神が嫌うものを身に付けることで、疱瘡神から逃れようという風潮も盛んであった。たとえば、疱瘡に罹患した幼児に赤い衣類を着せるだけでなく、看病人も赤い衣類を身に付けた。<sup>(79)</sup> そして疱瘡だけでなく、麻疹の流行の際にも登場したのが、疱瘡神、疱瘡絵、麻疹絵などであった。疱瘡神を祀る一方で、疱瘡神除けも行なわれ、とくに赤刷りの錦絵である「疱瘡絵」が護符として好まれた。<sup>(80)</sup> 疱瘡は基本的に小児感

染症であったため、その絵柄は張り子の木菟<sup>みみずく</sup>・起き上がりこぼし・でんでん太鼓という呪術性をもった玩具や、素戔鳴尊<sup>すさのおのみこと</sup>・源為朝（1139-1170？、以下は為朝）・鍾馗（赤く描かれた）のような守護神となる絵姿であった。その多くは魔除けの意味を込め、赤一色で描かれていたので「赤絵」ともよばれた。疱瘡に罹患した人の枕元近くに疱瘡絵を置き、その治癒を祈った。

疱瘡絵において、疱瘡神を追い払う構図に用いられた為朝は、1156（保元元年）の保元の乱に敗北し、伊豆大島に流されたが、その武勇によって伊豆諸島を支配下におさめた。八丈島では疱瘡神を退治したとされ、それ以後、島民は疱瘡に罹らなくなったと伝えられている。その伝説から戸口に「鎮西八郎為朝御宿」などと紙に書いて貼るという風習も生まれた。そうしておけば、その家の子どもは疱瘡に罹らないと信じられ、為朝が好んで疱瘡絵に描かれた。疱瘡絵は疱瘡に罹患した幼児への見舞品としても贈られ、無事に回復した後は、焼き捨てて川に流したようである。しかし、子どもが重症になったときには、疱瘡神が守護神の役を果たさなかったと考えられ、役立たずとみなされ、逆に非難的<sup>(81)</sup>とされることもあった。

疱瘡絵の絵柄の特徴は、「疱瘡や疱瘡神に直接挑んで悪を取り去るべくこの疫病と闘うような場面を描いた図像・呪歌は少ないのに対して、病気の治癒を予祝したり、特定の事物や時間が象徴する祝祭的世界を描いた図像・呪歌は多く見受けられる<sup>(82)</sup>」ことであった。ここでは疱瘡に対し直接的な対抗意識はみられない。疱瘡に対して攻撃的な姿勢で臨むのではなく、受容的な態度がみられるということである<sup>(83)</sup>。したがって、疱瘡患者やその触れた物品を忌避する心性は、少なくとも都市部においては強くなかった。『太平記忠臣講釈』の七段目に、疱瘡見舞いに来た人が帰り際に「ヲ、そふせう。コレ婆様。疱瘡見舞いの持ち遊びは、必ず捨てずと、人形屋へおろして、小遣ひの足<sup>たし</sup>にさつしやれ」というセリフがある。疱瘡に罹った幼児が使った玩具を、人形屋（玩具屋）にもっていくと、買い取られ、それが中古品として再び販売される。疱瘡絵も川に流したものを拾って売り物にしたようで、絵の色もあせ、構図

も見分けにくいものが多かった。<sup>(85)</sup>庶民は疱瘡を恐れ忌避していないので、疱瘡絵を流す行為は、感染を防ぐ意図からでなく、神送りの儀礼につながるものと考えられていたことに基づいている。

疱瘡だけでなく麻疹の場合も、錦絵が浮世絵師によって描かれた。これは「麻疹絵」とよばれる。麻疹絵は1862（文久2）年の麻疹流行時に数多く作成された。疱瘡と同様、麻疹に罹らないようにという祈り、たとえ罹患しても軽く済むようにという祈りが込められた錦絵であった。麻疹絵は麻疹を懲らしめる構図になっている。もっとも、それだけでなく、麻疹の予防法や心得、麻疹に罹った時に食べて良いもの、悪いものなどの文字情報も書き込まれていた。食べて良いものは、干瓢・人参・小豆・昆布・長芋・百合・大根・冬瓜・焼き麩・焼き塩の白粥などであり、悪いものは、そば・糠味噌・梅干・里芋・椎茸・唐茄子・ねぎ・もろこしなどであった。これら麻疹絵にあげられた食物は、『享保・元文諸国産物帳』（1735（享保20）～1738（元文3）年編纂）、『武江産物誌』（1822（文政7）年刊）、『府県物産表』（1874（明治7）年刊）などの記載によれば、江戸時代中期から明治時代初期にかけて、広く知られていた食物である。麻疹絵は護符という役割だけでなく、具体的な予防法や心得に関する文字情報を伝える役割ももっていた。<sup>(86)</sup>この予防や治療に対する食物情報は、1862（文久2）年の麻疹流行時の麻疹絵以外にはないとされている。もっとも、図像が情報伝達媒体として普及したのは、同時期に流行したコレラと同様であったが、この時の麻疹とコレラ以外は、ほとんどみられないものである。

麻疹絵には、麻疹禁忌や薬、麻疹を軽くするまじない、麻疹年表、麻疹によって儲かった商売と損をした商売の風刺、麻疹に罹った役者、麻疹神、麻疹の端唄など、さまざまな絵とそれに関連する文字情報が数多く盛り込まれた。しかし、これまでの民俗学や医史における麻疹絵の評価は、疱瘡絵の亜流程度のものであるということで、必ずしも高くない。医療水準の低さと有効な治療法がなかったため、まじないや迷信、民間療法などを描いた麻疹絵が歓迎され

たとされてきた<sup>(87)</sup>。しかし、たとえば三種の豆を煎じた「三豆湯」は中国医書<sup>さんずとう</sup>に載っている麻疹薬であり、種々の禁忌も医者が勧めていたものであり、当時の医療水準を反映した医療情報が盛り込まれていた。すなわち、麻疹絵は医療情報源として、麻疹養生書の内容を簡便化したものであり、情報を安く大量に、かつ迅速に供給したものであったと考えられる。幕末期の出版文化という背景のもとで、大衆化された医学的な知が安価に大量に商品化された結果であるといえる<sup>(88)</sup>。

麻疹絵は、それまでの麻疹流行を通じて蓄積された情報が盛り込まれるとともに、過去に人気を博した時事錦絵の構図を、そのまま借用するということも行なわれた。時事錦絵は幕末期の出版統制をきっかけに誕生し、錦絵に<sup>(89)</sup>時事的・風刺的な内容を盛り込んだものであった。たとえば、流行神の錦絵でよくみられた三人の流行神の拳遊びの図を、「麻疹拳」に作り替えた。また、錦絵で人気があった地震で被害を受けた者が地震鯨を打擲する図を、麻疹で不景気になった職業の者が麻疹神を打擲する図に作り替えるなどであった。麻疹絵は、疫病を題材としているにもかかわらず、滑稽という要素をもち、疫病がもたらす喜怒哀楽の諸相までも伝えている。

一方、呪いの類も疫病流行時には多く現われた。1708（宝永5）年に麻疹が全国的な流行をみせた際、国学者の天野信景（1663-1733）は随筆『塩尻』のなかで、

かゝる時いつも俗に様々のまじなひも亦はやり侍る。枇杷の葉を煎じて浴すれば疹疫に染ずとて湯浴するもあり。又、例の歌なんと粘しはべる。梅かゝはおのれひと木の匂ひにてよその草木にうつらさりけり、なんといふ歌を家々に聞つたへ、あらぬてにはに書てまじなひけるもおかし<sup>(90)</sup>と記している。さまざまな予防目的のまじないが口伝えに広がり、たとえば、「梅かゝ（香）はおのれひと木の匂ひにて、よその草木にうつらさりけり」というまじないの歌が流行した。「聞つたへ」、つまり口頭で伝わっていくので正確に伝わらず「あらぬてには」とあるように、ところどころ助詞を誤って

書く人もいたようである。

一方、宗教関係者は疫病の流行時には競ってお札やお守りを売りさばいた。1753（宝暦3）年の麻疹流行時には「麻疹の神」が登場し、三馬は「此ごろの人は、<sup>ほうそうがみ</sup>疱瘡鬼の<sup>あひだな</sup>合棚に、麻疹の神のあるとまで心得けん。（中略）まことに麻疹の神あらば、すみやかにちくらが沖え送り給へ。さらばおのれも御幣を振立、鐘と太鼓をうちならして、おくれおくれとちからを合せ奉る<sup>(91)</sup>べし」と記している。麻疹神はいまだ<sup>かみ</sup>疱瘡鬼の合棚に祭られる程度の存在であったものの、麻疹神として神送りが行なわれている。麻疹神送りが行なわれる「ちくらが沖」とは筑羅が沖のことで、日本と唐土・朝鮮との潮境にあったとされる架空の海である。また同1753（宝暦3）年6月26日付の江戸町触には、「此頃はしか神送と名付、子供大人交、太鼓を打ちはやし、屋台之様成物持歩行、跡より賽銭取集廻り候儀有之候。右躰之儀有之間敷事二候間、急度相止候様可申渡旨、年番名主申合通達<sup>(92)</sup>」と記されている。子供も大人も一緒になって太鼓を打ち囃し、屋台のようなものを担いで練り歩き、後から賽銭を集めた。神送りとは、疫病などの災難をもたらす神の依代を、鐘と太鼓で囃し立てながら隣の町や村の境まで送り、川や海に流すという民俗行事であった。麻疹神送りは、それ以前から行なわれていた疱瘡神送りの延長上に生まれたものであった。

また幼児向けには、鈴を付けた括り猿や小さな杵といった、麻疹を軽くするまじないの玩具が売られた。括り猿とは、子育てのまじないに用いる猿のぬいぐるみで、神社などからもらってきて、端午の節句の旗の下部や、子どもの着物の背中に付けられた。<sup>(93)</sup>こういった玩具は疱瘡では以前から<sup>みみずく</sup>木菟や起き上がりこぼしがあった。玩具は護符という特徴をもつものであったが、そればかりでなく、人びとが疫病関連の商品と商売を生み出すことによって、疫病不況に泣き寝入りしない意思表示ともいえる。<sup>(94)</sup>麻疹神自体も素朴な信仰というより、むしろたくましい商魂の産物といえた。

麻疹神と異なり、疱瘡神を祀っている神社は数多くあった。たとえば、

1712（正徳2）年に鬼子母神の境内に鷲明神（疱瘡神）が建立され、「疱瘡神ハ、これにかはりて眼前曹司が谷に鷲明神の幟をひらめかせ、下総に芋の神のお石をいだす。湯の尾峠の孫杓子、いもをすくふ靈験あれば、さゝら三八もお宿を申し、若狭小浜の六郎左衛門も神酒備へをもてなす。それさへ延喜式の神名帳に八名をはぶかれ、宇田川町の裏おもてを尋て見ても、藪芋屋といふ家名もミえず」とされる。<sup>(95)</sup>「曹司が谷の鷲明神」とは、現在の東京都豊島区の大島神社のことである。「下総の芋の神」については不明であるが、疱瘡のことは芋ともよぶので、疱瘡神をさしていると考えられる。「湯の尾峠の孫杓子」とは越前南条郡湯の尾峠の茶屋で売られた、疱瘡のお守りの杓子である。疱瘡絵のなかには「もて遊ぶ犬や達磨に荷も軽く湯の尾峠を楽に越へけり」と書かれたものもあり、かなり知られていたようである。「さゝら三八」は疫病や疱瘡除けに、板や紙に書いて門口に貼った呪符の文句であった。「若狭小浜の六郎左衛門」とは、997（長徳3）年に5人の疱瘡神が若狭国小浜の紺屋六郎左衛門宛に、疱瘡を軽くすることを誓ったとされる「謝りの証文」のことである。疱瘡が流行すると、これを呪符として門口に貼った。

江戸時代を通じて、疱瘡神やその呪符が庶民にとって身近な存在になっていった。疱瘡が毎年のように流行したからである。1814（文化11）年に刊行された橋本伯寿（?-1831）『国字断毒論』によれば、疱瘡は麻疹と異なり、都市では毎年、農村では数年おきに流行<sup>(96)</sup>った。このために疱瘡神は麻疹神に比べ、恒常的に信仰を集めることができた。しかしながら、疱瘡神は『延喜式』の「神名帳」には載っていない。神名帳とは927（延長5）年に完成した『延喜式』九・一〇巻のことで、官社2,861社が国別に記載されている。この神社は「式内社」とよばれ、神名帳に載っていることが、「由緒正しき神々」であることの証であった。疱瘡神はそこから外れている。疱瘡神でさえ、このように扱われていたので、民間信仰の世界で新参者であった麻疹神の待遇は推して知るべしであった。たとえば、文政期（1818～1830年）に完成した『新編武蔵風土記稿』や『葛西志』によれば、麻疹除けで脚光を浴びた半田稻荷（現・

東京都葛飾区東金町)は、享保期(1716～1735年)から人びとの信仰を集めるようになった<sup>(97)</sup>。しかし化政期(1804～1830年)に書かれた津田十方庵敬順『十方庵遊歴雑記』には、最近「願忍」(願人坊主)がお札を売り歩いているが、場所が辺鄙であったため、実際に参詣する人は少ないと記されている<sup>(98)</sup>。半田稻荷流行の実態は、願人坊主の代参祈願が主流だったようである。

江戸の願人坊主とは、京都の鞍馬寺大藏院・円光院の二院を本寺とする二派を形成し、それぞれ本寺によって任じられた触頭役や組頭によって集団を形成する乞食坊主のことであった<sup>(99)</sup>。喜多川守貞(1810-?、以下は守貞)の隨筆『守貞謄稿』(1853(嘉永6)年成立)には「雑業」の巻に「願人坊主」が載っている。願人坊主のなりわいは「戯諺を専らとして、その所為種々あり」とするなかで「半田行人」もあげられている。それは「天保中、初めてこれを行ひ、今は廃せり。その扮、京坂の金毘羅行人と同じくして、白を紅に換ふるのみ。諸服必ず紅綿。手に紅綿<sup>のぼり</sup>の幟に半田稻荷大明神と筆せるを携へ、右手にれいをふり、痘瘡麻疹の軽を祈るに<sup>まげ</sup>矯て、専ら諧諺踊躍す<sup>(100)</sup>」と記されている。半田稻荷の願人坊主は、疱瘡のときの魔除けの色である赤の着物で、鈴と赤い幡をもち、「疱瘡も軽い、麻疹も軽い」といいながら、おもしろおかしく踊って門付けした。願人坊主の始まりについて、守貞は天保期(1830～1844年)に登場したと記しているが、1800(寛政12)年頃のことであったとする研究もある<sup>(101)</sup>。

1836(天保7)年の麻疹流行は、前述のように子どもの患者が多く、軽症者が多かった。漢方医であった多紀元堅(1795-1857)の『時還読我書』(1845年刊)によれば、文政期(1818～1830年)の流行に比べると軽症で、薬を必要としない者もいた。ただ、翌1837(天保8)年の正月まで、長期にわたって散発的に患者が発生した。文政期の流行は軽症とはいえ、多数の大人の患者が出て、余毒対策に躍起となるので、禁忌に関するさまざまな商売は不人気であった<sup>(102)</sup>。しかし、天保期の流行は子どもの患者が中心であり、麻疹不況になりやすい商売には、あまり影響が出なかったようである。このように天

保期（1830～1844年）の麻疹が短い間隔の流行であり、軽症であったのに対し、1862（文久2）年の麻疹は、約26年の空白後に流行し、多くの患者が出て、とくに劇症の成人患者が出た。この時の状況について『武江年表』の記述は、ほかの年の流行と比べると詳細にわたり、各町では「八月の半ばより、町々木戸に<sup>いみだけ</sup>斎竹を立て、軒に奉燈の挑灯を釣り、鎮守神輿獅子頭をわたし、神樂所をしつらへて神をいさめ、この禍を攘ふといへり。後には次第に長じて大なる車<sup>だし</sup>樂を曳渡し、伎踊<sup>おどりねりもの</sup>遊物を催して街頭をわす。此の風俗一般になり、又諸所の神社にも臨時の祭執行せしもこれあり」と記されている。<sup>(103)</sup>神を鎮めるための山車や踊り、練り物、臨時祭が盛大に行なわれた。これと同様のことが、京都でも行なわれた。京都の町触によれば、「此節中京下京辺夜分神燈を持歩行、多人数付添、中二者屋体を拵、鉦太鼓又ハ三味線ニ而囃子、吳形之体ニ而踊歩行候<sup>(104)</sup>」とされ、夜に神燈をもち歩き、多人数が付添って屋台を引き、鉦太鼓・三味線のお囃子付きで、異形の体で歩行したとされる。

一方、コレラも多くの風習や民間信仰などを生み出した。前述のように、コレラは死亡率が高く、庶民がパニック状態に陥った事例は数多くあった。医療に絶望して、防除のため神仏への祈願やさまざまな信仰、加持祈祷に走る人が多かった。<sup>(105)</sup>コレラを追い払うため、祭礼でもないのに、町内の鎮守におさめられている神輿を渡御させ、神事に用いられる<sup>いみだけ</sup>斎竹を立てたりすることもあった。<sup>(106)</sup>軒下に注連縄を結わえ、提灯を灯すこともあった。節分の夜のように豆を撒き、あたかも正月のように門松を飾り立てることもみられた。コレラ除けの定番であったのは、八つ手の木の葉、「みもすそ川」（伊勢神宮の五十鈴川の別名を詠んだ）の守り札、そしてにんにくの黒焼きの三つであった。八つ手の葉は厄除けに効果があると信じられ、軒下に吊るしておけば、コレラも入ってこられないと考えられた。「みもすそ川」を詠んだお札は、伊勢神宮の神徳により悪疫を祓い清め流す靈力を有すると信じられていた。これはコレラ祓いの効能もあるとされた。にんにくの黒焼きは強烈な臭いを放ち、この臭いによってコレラは近寄ってこないとされた。<sup>(107)</sup>



コレラが蔓延した地域においては、思いつく限りで厄払いの除災儀礼が行なわれた。除災儀礼は主に、仏教関係、神道関係、民俗宗教に分類できる<sup>(108)</sup>。それぞれ異なる除災儀礼が行なわれているものの、相互に競合し対立することはなかった。むしろコレラをきっかけに、家と共同体が一体となって、ありとあらゆる儀礼が行なわれた。たとえば、救済を求める勧請も祝祭のひとつであった。コレラによる死の恐怖、村存亡の危機を払い除けようとした。むしろこれゆえに共同体は機能し、もてる者はカネを供出し、もたざる者は宮造営やその他の労役などの奉仕をした。構成員それぞれの役割が円滑に機能し、団結の機運も生まれた。一方、勧請を受ける側であった神社、たとえば、京都・吉田神社はコレラの厄災をきっかけに、高額の祈祷料を請求し受け取っていた。八百万神を合祀していた吉田神社は、地方神社を包括する立場にあり、日常のネットワークの中で多くの村を取り込んで、効験あらたかであると説いたようである<sup>(109)</sup>。

## 5 風刺と滑稽

疫病を題材とする戯作も生まれた。たとえば、十返舎は麻疹を題材に、1824(文政7)年正月6日の江戸を舞台にした戯作『右之通麻疹に寿福請取帳』を書いた。この序文には「麻疹する子供衆へお伽にも、とこじつけしハ、少しも差合禁物でなき咲<sup>わら</sup>ひの種本、御読<sup>ろう</sup>じて肥立給へ。それにて寿福請取帳と題することしかり」と記されている<sup>(110)</sup>。この戯作は当時流行した黄表紙と同様、絵本の形をとり、子供向けの麻疹のお伽という体裁がとられている。しかし、内容は節分の鬼と麻疹神と風邪の神の三者が、美しい女房に横恋慕し争いをおこすという、大人向けの喜劇であった。十返舎による麻疹神は、ただの好色で金もない野暮で非力な流行神にすぎず、畏怖の対象として表わされていない。しかし多くの戯作では、鍾馗や為朝などのヒーローが疱瘡神や麻疹神を降参させ、疱瘡や麻疹を軽くするという約束を取り付けるという民間信仰のパロディとなっている<sup>(111)</sup>。

戯作者の手になる麻疹関連の出版物のなかには、1824（文政7）年に刊行された滑稽本『麻疹御伽双紙』がある<sup>(112)</sup>。同書の構成は、冒頭に「麻疹によるしき食物」のリストが禁忌とともに載せられている。本文は、武将の姿に擬人化して描かれた種々の生薬が、「麻疹鬼」を成敗するという単純な筋書きで、麻疹鬼が人間界に降りてくる一方で、「薬種方」はそれを迎え撃つという筋立てである。薬種方の布陣は、本町三丁目という江戸の薬種街から馳せつけた唐物（輸入薬種）と和薬（国産薬種）が、定番の麻疹薬である升麻葛根を大将に、麻疹鬼の攻撃を待ち構える。そして升麻葛根剤と書かれた旗の下、升麻葛根湯の薬剤である升麻・葛根・甘草<sup>かんぞう</sup>・芍薬・桔梗と書かれた衣装を身に付けた武将が居並ぶ。その後ろには「涼膈剤助伏兵」と書かれた屏風を隔て、涼膈散の薬剤である甘草<sup>おうこん</sup>・大黃<sup>ぼうしやう</sup>・黄芩<sup>れんぎやう</sup>・芒硝<sup>はっか</sup>・連翹<sup>しし</sup>・薄荷・扈子が控える。桔梗と書かれた武将がもつ大きな木の葉は、まじない歌を書く多羅葉の葉である。

この滑稽本には、三人の病人が登場し、そのうちの一人は駄太吉という子どもである。駄太吉がわがままであることに付け入って、麻疹鬼は駄太吉に「何でも四文」という均一料金の安い煮売屋で、禁忌食物をたらふく食べさせようと企む<sup>(113)</sup>。しかし、薬種方にばれて失敗する。都市部の子どもは、安い煮売屋で買い食いをしていたので、麻疹禁忌は大人だけでなく、子どもにも教え込む必要があった。さらに、大人向けの本であっても、あたかも子ども向けのような体裁をとっているのは、ある種の滑稽（おかしみ）とともに「癒し」を誘っているといえる。同書にみられる擬人化された生薬と麻疹鬼の絵は、後の文久期（1861～1864年）の麻疹絵の趣向の先駆けとなった。

同書の挿絵とまったく同じ構図の麻疹絵が1862（文久2）年に発行され、しかも短期間に大量に発行されている<sup>(114)</sup>。また、これ以前にも文政期（1818～1830年）に売られた一枚物の刷り物があった。たとえば、「麻疹名所図会」である。いわゆる名所図会のパロディであるが、「麻疹山全快寺」への道のりを示す絵図である。同書には「かつこん塔」（葛根湯）や「づつう（頭痛）坂」

「諸商人ふけい木（不景気）」「くすりやおゑびすの宮」などの名所が描かれている。一色刷で文久期の麻疹絵のような華やかさはないものの、麻疹の症状や世情を笑い飛ばす趣向がみられた。<sup>(115)</sup>

『麻疹御伽双紙』と同じ1824（文政7）年に刊行された滑稽本に、乍昔堂花守の『麻疹せん語』がある。同書は麻疹景気に浮かれる世間を揶揄した滑稽本であった。種々の麻疹呪いが金儲けの手段にすぎないことを描写している以外に、他の麻疹関連本と異なる特徴があった。この滑稽本も欽明天皇（510～570年）の時代から始まる麻疹流行史を掲載しているが、他の書籍のように麻疹が20～30年ごとに、周期的に巡ってきていることを示すためではなかった。むしろ逆で、長期的にみた場合には、それほど規則的に流行しているわけではないことを示している。流行周期について、

扱、疱瘡に神あれば麻疹の神もあるものと、めつたにこわがる馬鹿律儀、かならず廿一二年に間違なく流行る事、これ正直なる神わざ也と思ひ込だる偏屈者、孫子の末までいひ伝へて、廿余年を指折て、恐れあへるが不便さに、かくわづらハしく年紀をしるし、愚人の惑ひをさとさんとす。まづ此病ひのはやりし事、久しき時は百年か二百年も間あり。又邪気の盛んなる折は、三年目にはやりたる事もあり。これを以ておす時は、決して神の<sup>しわざ</sup>為業に非ず<sup>(116)</sup>。

と述べている。麻疹の流行周期は昔から21～22年できっちりと流行ってきたわけではない。不定期であるから、麻疹は神の仕業ではないという。同書は滑稽本特有のパロディの延長上にあるとともに、過去のデータを示して麻疹神を否定している。乍昔堂花守は世間を風刺する鋭い視点によって、現実にはありえないことを否定した。

また麻疹を題材とする戯作である『麻疹太平記』は、原本の所在は不明であるものの、1901（明治34）年刊の「続帝国文庫」に翻刻が掲載されている。その内容はそれまでの戯作と類似で、麻疹が人間界に攻め寄せ、薬がそれを退治するというものである。<sup>(117)</sup>「麻疹かわきの守」は、1836（天保7）年の麻疹

流行の際に討ち死にした父「大熱入道病元齋」の無念をはらすため、1862（文久2）年に一族の「ころり死左衛門」とともに、種々の病を味方につけ、人間界の体内城へ攻め込む。「ころり死左衛門」とは、1862（文久2）年の夏に、麻疹流行期の後半から重なって流行したコレラを意味する。この麻疹勢に対し、医者や薬種、麻疹によい食物、麻疹で不況になった商人が共同で戦い、麻疹勢を生け捕りにする。そして、麻疹勢をもとの居住地である「百済国」へ引き渡し、日本の地から永遠に遠島とする。この点に、麻疹は大陸から長崎経由で入って来る疫病であるという認識があったことがわかる。それと同時に、麻疹を元の場所に戻すという発想は、排除や撃退という意識よりも「共生」の意識があったことを示している。

麻疹合戦の有様は、そのまま麻疹絵にもなった。<sup>(118)</sup>『麻疹太平記』の話を描いた麻疹絵は、すでに1858（安政5）年のコレラ流行の翌1859（安政6）年に発行されている。「麻疹能毒合戦図」という麻疹絵であり、左上には麻疹神だけでなく、コレラや霍乱<sup>かくらん</sup>（日射病）など、さまざまな病気の神が描かれている。<sup>(119)</sup>それに対し、麻疹禁忌や麻疹によい食物が描かれ、合戦の体裁がとられている。発行された1859（安政6）年は、1836（天保7）年の麻疹流行から約23年が経っていることもあり、麻疹の流行が近いことを見込んで刊行されたと考えられる。

前述の半田稻荷の願人坊主も、1862（文久2）年の麻疹流行時に、麻疹絵に描かれた。飼い葉桶や房楊枝の登場人物とともに、願人坊主も赤い衣装に白い頭巾の出で立ち、手には赤い幟をもって、麻疹神を足で踏みつけている。ただし、顔は薬袋であり、半田稻荷の願人坊主の体を借りた「蒼龍丸」という虫おさえ薬の登場人物という設定である。小児の万能薬ともいべき虫おさえの薬が、小児守護の象徴として描かれた。また、「はしかの養生」という麻疹絵では、半田稻荷の願人坊主の姿をした「ほうそう神」が、「はしかの神」と相撲をとっている。行司は薬匙を手にした医者「熊胆齋角院」である。文面では、一般に麻疹と疱瘡を同じような病気と思っている人が多いが、病気

の性格が異なるため、養生法も異なると注意を促し、麻疹のときに食べてよい食物リストをあげている。

一方、麻疹養生の情報も出版という形で大量に流布した。もっとも、医療情報だけでなく、1862（文久2）年の流行中には麻疹関連の娯楽物ともいえる出版物も数多く出された。たとえば、『麻疹流行雑記』、『文久麻疹録』、『麻疹流行記』などがあり、それらは「麻疹ないもの尽くし」「麻疹百人一首」「江戸名所麻疹のかる口」「麻疹なぞなぞ合わせ」「麻疹厄除道化三十六歌仙」「流行麻疹一口ばなし」「流行麻疹三幅対」「麻疹の暦」「麻疹柳樽」「麻疹おどけ歌かるた」などの雑多な文を、それぞれ一冊に綴じ合わせたものであった。<sup>(120)</sup> これらの出版物は短期間に多様なものが出されたが、百人一首や三十六歌仙については、ほぼ同一の内容であった。しかし百人一種のパロディが、多種多様であったわけではなく、ほぼ同一内容のものが流布したということである。<sup>(121)</sup>

さらに、歌舞伎の流行に便乗して、『<sup>おうむせき</sup>鸚鵡石』の麻疹パロディ版ともいうべき『はしかさやあてかけ合』という冊子が刊行されている。<sup>(122)</sup> 『鸚鵡石』は、歌舞伎や狂言の名科白を抜粋した小冊子である。役者の声色をまねて楽しむために、主に江戸で歌舞伎興行ごとにさかんに刊行された。『はしかさやあてかけ合』のもとになっているのは歌舞伎『さや当て（鞘当）』である。この歌舞伎の内容は、不破伴左衛門と名護屋山三郎（名護屋山三）がすれ違いざまに、刀の鑢が当たって小競り合いとなり、そこに長兵衛女房のお近在止めに入る、というだけの設定である。<sup>(124)</sup> 『はしかさやあてかけ合』もまた、内容といえるようなものはなく、三人の登場人物による麻疹がらみの台詞の掛け合いで構成されている。『はしかさやあてかけ合』は実際に劇場にかかったわけではないものの、配役は、「湯ハ難左衛門」（不破伴左衛門のもじり）を河原崎権十郎（1838-1903）、「身の無事やたの」（長兵衛女房お近）を沢村田之助（1845-1878）、「かごやさんざ（駕籠屋山三）」（名護屋山三のもじり）を市村羽左衛門（1844-1903）というように、当時の若手人気役者をあてている。「湯ハ難左衛門」は入浴禁忌、「身の無事やたの」の「たの」は沢村田之助の名からとり、「かご

やさんざ」は、麻疹の流行で駕籠昇きの人足が不足したことからとっている。このように禁忌や庶民の暮らしがパロディ化されていた。

コレラも、さまざまな刷り物がつくられた。<sup>(125)</sup>たとえば、コレラ流行を三幅対の軸物風に見立てた「流行三幅対」がある。そのなかで、「かはず なまいわしのつかみ売、のまず すいどうの水くミ、くわず やたいミせのくい物、いそがし 穴ほりのてら男、うとし とふくの志んるい、ひまなし おんぼう、かけ直 ちうもんのはやおけ、たか直 白むくのそんりやう、定直 百か日のしきり」などと記されている。コレラ感染の恐れがあるとされた生鰯、玉川上水の水道水、屋台店の食物を避けること、死者の埋葬に忙しい寺男と隠坊、非常時のときに遠くでは役に立たない親類を揶揄し、そして、早桶は輿屋の言い値になり、葬礼喪服の損料（借り賃）は高くなり、百か日の法要の仕切代は変わらないとしている。「流行三幅対」と内容的に重なるが、「いそがしいねへ ひまだねへ番付」というコレラによる明暗を番付にしたものもあった。「いそがしいねへ」のほうは、「大利：火葬三昧場 潤益：早桶屋職人 古着：湯灌場買 込合：腹按揉療治 内職：穴掘の寺男 現金：薬店の調査 参詣：花売ばゝア 強飯：寺町のとんとん」があげられている。忙しくなった筆頭の大利（大いに儲かった）は、火葬三昧場である。大いに潤ったのは早桶屋の職人であり、次は死体を清める湯灌（濯）場において、安値で衣類を買い叩く古着屋である。腹揉みの按摩が込み合い、寺男は穴掘の内職で忙しい。薬屋は現金掛値なしで大儲けし、婆さんの墓参用花売りは大いに繁昌したとしている。

大禍転じて大福となった大忙しの人びとと逆に、不運な「ひまだねへ」の人びともいた。「大息：水道の水汲 損毛：夕河岸の鰯売 引込：下し薬の看板 揚立：家台店の天麩 二八：夜蕎麦商人 芋田：夜見世の四文屋 贅沢：栄曜あきうど 縁日：夜商人」があげられている。大きなため息をついているのが水道の水汲みであった。損害を受けているのはまったく売れない鰯売であった。便秘用の下し薬の看板は引っ込めざるをえない。市中の食べ物屋、

なかでも屋台や露店はまったく客がないという状態であった。これらは揶揄も交えて、洒落っ気で記されたものである。当時の世相を反映しているとともに、コレラという疫病に直面した庶民の悲壮感はあまりなく、むしろ憐れみと同時に「たくましさ」さえ感じさせるものであった。死者の悲惨さを超えて、日々の暮らしの厳しさに直面する生き残った人びとの図太さないしエネルギーを感じさせるものであった。さらに『道化、厄除三十六歌仙』という刷り物では、三十六歌仙の名歌を題材に本歌取りどころか、病魔を駄洒落で笑い飛ばそうとしている。コレラ騒動の顛末を笑って、洒落ようとする庶民の底力の表現であった。たとえコレラが猛威をふるって、地獄状態に陥ったとしても、災厄は一時の時の流れの中にあるという意識が根底にあった。

## 6 結びにかえて

江戸時代には多くの疫病が流行を繰り返した。これに対し、庶民は科学的な知識や情報をもっていなかったが、生死に関わることには関心をもたざるをえず、経験的にその対処法を模索した。しかしながら、これは疫病の流行時のみに限られたことでなく、医療を含め健康に対する庶民の関心は高かった。予防や治療に関する情報の需要は大きく、それに対し数多くの養生書が応え、庶民の医療に関する根本的な考え方を形成した。養生の根底には人間に内在する自然治癒力という中国医書の影響があった。中国では治癒する力を正気、それに対し否定的な邪気と定義された。治癒とは正気が邪気を倒すことを意味した。しかし日本の養生思想では、否定的に感じられがちな病気や症状に関して、生命の肯定的な働きを強調する。「邪正一如」として、正気と邪気を対立させない考え方があり、邪正は相対的な関係であるとしている。疫病に対する庶民の基本的な対応は、この考え方が根底にあった。疫病の大流行初期には怖れがあり、回避しようとする動向がみられたものの、その後は排除あるいは打倒という考えはあまりみられない。

疫病の流行に対し、当時の先端医療を用いても根本的な治癒は困難であっ

た。したがって、幕府は予防よりも、流行後の対策に力を入れざるをえなかった。それでも比較的素早い対応がみられた。江戸では町会所などの組織を使って、主に貧困層への給付金や薬、御救米などの配布が行なわれた。享保の改革時には養生所が開設された。しかしながら、庶民の多くは自然治癒力に頼らざるをえなかったため、幕府の対策には自ずと限界があった。一方で、疫病の流行によって、医者や薬屋は繁昌した。逆に、禁忌に触れる商売が成り立たなくなり、盛り場をはじめとして経済活動は停滞した。さらに、疫病に効くとされた食物の価格が高騰し、経済的な混乱もたらされた。このような状況のなかで、庶民は自助に努めなければならなかった。そして疫病流行の際には、医者や薬に頼ったものの、医者や薬は万全なものではなかった。めったに遭遇しない流行に直面した医者は、医書の簡単な記述に頼るか、中国医書の注釈書に頼った。庶民が掛かる医者の多くは藪医者であり、庶民の情報の入手経路は、篤志家によって無料で配布された薬や禁忌に関するリストや口コミであった。

玉石混淆の町医者と多種の売薬、巷に飛び交う禁忌情報の中で、庶民は試行錯誤を繰り返し、自ら最善と思われる方法を求め続けた。もっとも、庶民は医者や薬などの医療だけでなく、寺社に祈願するなど、宗教的呪術的な手法も取り入れて治癒を願った。神仏による罰、疫神の仕業、呪詛、あるいは死霊の憑依などに病因が求められることも多く、祈祷やお祓い、呪いなどの形で広く治療が行なわれた。とくに、疫病は疫神の仕業と信じられ、疫神が憑りつくことで罹患すると考えられたため、憑りつかれないよう、その対応策に工夫が施された。それは単に疫神を撃退するのではなく、祀って丁重に送り出すことによって、その疫病から逃れるという方法がとられた。言い換えれば、疫神にお引き取りを願った。

また疱瘡絵や麻疹絵などの守護神を描いた錦絵が、護符として好まれた。疱瘡絵の絵柄の特徴は、疫病と闘う場面を描いた図像や呪歌は少なく、治癒を予祝するような祝祭的世界を描いた図像や呪歌が多くみられた。疱瘡に対



して攻撃的な姿勢で臨むのではなく、受容的な姿勢がみられた。一方、麻疹絵は罹患しないように、あるいは罹患しても軽く済むよう祈りが込められていた。麻疹絵は絵柄だけでなく、予防法をはじめとして食物に関する文字情報も書き込まれた。麻疹絵は護符としての役割とともに、予防法に関する情報も伝える役割も担った。一方、疫病の流行時には宗教関係者は、お札やお守り売りさばくと同時に、まじない玩具など疫病関連の商品が売られた。疫病を題材にした戯作も多く創られた。出版業者は、疫病を無事にやり過ごそうという願いと、社会的混乱への不安や不満をくみ取ると同時に、それを滑稽で受け止めるという機能を果たした。この意味で、出版業者は情報発信の拡大によって、混乱の要因をつくと同時に、多くの人びとのニーズに応えていたともいえる。

このような江戸時代の疫病対応は、疫病と折り合いを付けてやり過ごすという、共生の知恵であった。この共生のバランスを崩し、混乱を引き起こした要因は、疫病を商機とみなし、それに群がる諸商売の展開であった。医療の広範な普及と、それとともに高まる医療への依存を前提に、疫病対策はさまざまな形で商品化された。たとえば、後養生薬、出版物、宗教関連品などであった。そして出版物のなかで医書や戯作、さらに麻疹絵の中で非難され揶揄される対象になったのが、医者と薬屋と宗教関係者であった。出版業者は疫病商売を揶揄する一方で、数多くの疫病に関する情報を発信したが、それは家庭内における療養経験の蓄積が難しいことを示していた。江戸は疫病の流行以降、商業主義に彩られ、半ば人為的に大きな混乱を繰り返すことになった。また出版業者は、幕府の取り締まりに触れないレベルで、多くの風刺を込めて諧謔も送り出し、麻疹で潤う医者や薬屋、そして麻疹神に対する揶揄や打擲の図という形態で表現した。これは結局、実効ある対処ができない幕府に対する批判の意味も込められていた。

コロナ禍において、江戸時代の疫病対応から学ぶ点は多い。とくに近代の感染症の展開と比べた場合、大きく二つの点がある。一つは養生という考え

方である。これは人びとの「癒し」につながる。三木清（1897-1945、以下は三木）は『人生論ノート』において、すべての養生訓は、まったく個性的である健康から出立しなければならぬと述べ、「健康の問題は人間の自然の問題である。というのは、それは単なる身体の問題ではないということである。健康には身体の体操と共に精神の体操が必要である」と述べている<sup>(127)</sup>。そして、自然は一般的なものではなく個別的なもの、また自己形成的なものであると述べる。さらに近代になって健康が失われている原因は、自然哲学あるいは自然形而上学が失われたことであるという。そうであるとすれば、江戸時代の人びとは健康という概念はもたないものの、それぞれ個性的な自然観に従い、「癒し」という精神の体操によって健康を維持しようとしたといえる。

もう一つは疫病の病因と人びととの関係である。真の病因は江戸時代には判明していなかったものの、病因との共生という考え方である。疫病が流行すれば、多くの人命が失われたにもかかわらず、江戸時代の人びとは疫病に対して憤懣や憎悪の情は基本的に希薄であった。養生の考え方にしたがえば、病は怠慢・無知・不養生から来るものである。その意味で人びとの姿勢によって十分に対応可能なものである。周期的に流行を繰り返す疫病は、経験知として積み重ねられるにともない、その対応は行事化していった。疫病は原因のわからない怖れの対象としてではなく、日常生活あるいは一生のうちで出会う儀礼といえるものになった。その意味で病因は排除すべきものでなく、共に存在するものになった。後にこの疫病に対する感情を、永井荷風（1879-1959）は「私は医学の進歩しなかつた時代の人々の病苦災難に対する泰然たる態度と、其の簡易なる生活に対して深く敬慕の念なきを得ない」と評している<sup>(128)</sup>。医学が進歩している現在において、むしろ医学が進歩していなかった江戸時代の人びとの姿勢に学ぶべき点が多いのではないだろうか。

注

- (1) 拙稿「感染症と自然開発」（『経営ノート』京都総合経済研究所、第291号、2021

- 年、11 ページ)。
- (2) 酒井シヅ『病が語る日本史』講談社学術文庫、2008 年、178～93 ページ。
  - (3) 奥武則『感染症と民衆—明治日本のコレラ体験』平凡社新書、2020 年、115～35 ページ。
  - (4) キリスト教では、少なくとも神学的見地から、肉体よりも「魂の救済」のほうが重視されてきた。そのため初期キリスト教の頃から、ユダヤ教で厳格に定められていた「衛生基準」を軽視する傾向があった。竹下節子『疫病の精神史—ユダヤ・キリスト教の穢れと救い』ちくま新書、2021 年。
  - (5) 拙稿「明治期京都の感染症とその対応—コレラと衛生都市の形成」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第 17 号、2012 年、518～67 ページ)。
  - (6) 香月牛山『牛山活套』、自序、1699 年(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)。
  - (7) 1857(安政 4) 年に来日した軍医ボンベは著書『日本滞在見聞記—日本における五年間』(沼田次郎・荒瀬進共訳、丸善雄松堂、1984 年)において、日本人の 3 分の 1 は顔に膿疱もっていると記している。
  - (8) 鈴木則子『江戸の流行り病—麻疹騒動はなぜ起こったのか』吉川弘文館、2012 年、2 ページ。
  - (9) 酒井シヅ、前掲書、2008 年、148～54 ページ。
  - (10) 病原体の認識がなかった当時、多くの人の命を奪った感染症に呼び名を付けることによって、故人を悼み懐かしもうとしたと考えられる。氏家幹人『江戸の病』講談社選書メチエ、2009 年、18～20 ページ。
  - (11) 拙稿、前掲論文、2012 年、518～67 ページ。
  - (12) 瀧澤利行『養生論の思想』世織書房、2003 年；瀧澤利行「日本における養生論の文化」(『障害史研究』九州大学大学院比較社会文化研究院、創刊号、2020 年、15～34 ページ)。
  - (13) 養生は「気のコスモロジー(宇宙観・自然哲学)」を背景にもつ。西平直『養生の思想』春秋社、2021 年。
  - (14) 貝原益軒著・石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』岩波文庫、1961 年、64～100 ページ。
  - (15) 樺山紘一「養生論の文化」(林家辰三郎編『化政文化の研究』岩波書店、1976 年、436～7 ページ)。
  - (16) 鈴木敏夫「江戸時代における養生書の研究—身体運動の養生的価値をめぐって」(『北海道大学教育学部紀要』、第 22 号、1973 年、411～24 ページ)；入口敦志「江戸時代の養生書出版とその普及」(『日本健康学会誌』、第 85 巻 1 号、2019 年、14～7 ページ)。「益軒本」(益軒の和文著作群の総称)の浸透については、横田冬彦『日本近世書物文化史の研究』岩波書店、2018 年；辻本雅史『江戸の学びと思想家たち』岩波新書、2021 年、111～35 ページ。

- (17) 貝原益軒著・石川謙校訂、前掲書、1961年、9～191ページ。
- (18) 石川謙「解説」(貝原益軒著・石川謙校訂、前掲書、1961年、281～95ページ)。  
益軒は養生における音楽の重要性も説いた。光平有希「貝原益軒の養生論における音楽」(『日本研究』、第52号、2016年、33～59ページ)。
- (19) 安藤優一郎『江戸幕府の感染症対策—なぜ「都市崩壊」を免れたのか』集英社新書、2020年、32～3ページ。
- (20) 貝原益軒著・石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』岩波文庫、1961年、137～57ページ。
- (21) 平野重誠著／小曾戸洋監修／中村篤彦・看護史研究会翻訳『病家須知』農山漁村文化協会、2006年。実際には文化・文政期(1804～1830年)以降、庶民の間で薬の乱用が問題になっていた。樺山紘一、前掲論文、1976年、459～65ページ。
- (22) 松田博公「鍼灸と自然治癒力の出逢いをめぐって—江戸の養生書『病家須知』が告げるもの」(『全日本鍼灸学会雑誌』、第58巻2号、2008年、156～65ページ)。
- (23) 同上論文、164ページ)。
- (24) 河内屋可正著／野村豊・由井喜太郎編『河内屋可正旧記』清文堂出版、1955年。
- (25) 香月牛山『牛山活套』、1699年(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)。
- (26) 同上書。
- (27) 護持院隆光僧正著／永島福太郎・林亮勝校訂『隆光僧正日記』続群書類従完成会、1969～70年。
- (28) 鈴木則子、前掲書、2012年、30～4ページ。酒湯とは、米のとぎ汁に酒を少々加えたものを沸かして水浴し、発疹のかさぶたを洗う儀式で、次第に疱疹・麻疹・水痘の回復を周囲に知らしめる華美な儀式と化していった。入浴せずに形式的に湯をかけるだけで済ますことも行なわれた。
- (29) 河内屋可正著／野村豊・由井喜太郎編、前掲書、1955年。
- (30) 葛飾蘆菴『麻疹必用』、1824年(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)；鈴木則子、前掲書、2012年、39ページ。
- (31) 大石学「日本近世国家の薬草政策—享保改革期を中心に」(『歴史学研究』、第639号、1992年、11～23ページ)；笠谷和比古『徳川吉宗 ちくま新書、1995年；田代和生「享保改革期の朝鮮薬材調査」(山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界(下)』思文閣出版、1995年)。
- (32) 富士川游著・松田道雄解説『日本疫病史』東洋文庫、1969年、55ページ。
- (33) 林良適・丹羽正伯著／浅見恵・安田健訳編『普救類方』科学書院、1991年。もともと、この元になっている本草学は、後世の本草学に比べて、十分な観察と徹底的な現地検証など、厳密な実証的基盤の上に立つものではなかった。謝蘇杭「近世前期本草学における実学思想の考察—稲生若水と貝原益軒を例に」(『人文公共学研究論集』(千葉大学)、第38号、2016年、178～96ページ)。

- (34) 安藤優一郎、前掲書、2020年、49～51ページ。
- (35) 望月三英・丹羽正伯『救民薬方』、1733年（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- (36) 近世史料研究会編『江戸町触集成』塙書房、1995年、369～70ページ。
- (37) 津村正恭『譚海』、国書刊行会、1970年。
- (38) 単なる施しに対して、貧困層が応えるとは限らない。その理由はさまざまである。たとえば、過去にはイギリスの救貧法の場合、現在では日本の生活保護法の申請の場合がある。いずれにしても貧困層の精神的な抵抗感は無視できない。拙稿「貧困問題と報徳思想（上）（中）（下）」（『報徳』、第113巻1292～4号、2014年）；金澤周作『チャリティの帝国—もうひとつのイギリス近現代史』岩波新書、2021年。
- (39) 『享保撰要類集二十四』（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- (40) 藤拙斐『麻疹気候録』、1776年（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）。
- (41) 拙稿「第一期京都策への道—医学の展開を中心にして」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第10号、2005年、123～53ページ）。
- (42) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第4巻、塙書房、1995年、137～8ページ。
- (43) 同上書、146ページ。
- (44) 同上書、173ページ。
- (45) 大熊房太郎「小石川養生所（医史にみる医の倫理）9」（『臨床科学』、第8巻10号、1972年、1437～40ページ）；川崎房五郎「江戸における社会福祉事業2—小石川養生所」（『選挙』、第35巻4号、1982年、12～6ページ）；福濱嘉宏「小石川養生所の絵図面を中心とした建築的史料の検討と復元的考察」（『東京大学史紀要』、第33号、2015年、1～37ページ）。
- (46) 斎藤月岑著・金子光晴校訂『増訂 武江年表1』東洋文庫、1968年、160ページ；鈴木則子「江戸時代の麻疹と医療—文久二年麻疹騒動の背景を考える」（『日本医史学雑誌』、第50巻4号、2004年、501～45ページ）。
- (47) 橘尚賢『麻疹精要方』、1771年（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- (48) 張璐玉著／上月専庵撰『麻疹精要』、1731年（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）。
- (49) 張璐玉撰『麻疹精要國字解』、1824年（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- (50) 斎藤月岑著・金子光晴校訂『増訂 武江年表1』東洋文庫、1968年、196ページ。
- (51) 鈴木則子、前掲論文、2004年、515～6ページ。
- (52) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第11巻、塙書房、1999年、75～7ページ。
- (53) 式亭三馬「麻疹戯言」（式亭三馬著・棚橋正博校訂『式亭三馬集』国書刊行会、1992年、59～74ページ）。
- (54) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第11巻、塙書房、1999年、80～2ページ。
- (55) 斎藤月岑著・金子光晴校訂『増訂 武江年表2』東洋文庫、1968年、189～90ページ。

- ジ。須藤由蔵著／鈴木棠三・小池章太郎編『藤岡屋日記』第10巻、三一書房、1991年、436～7ページ。
- (56) 京都の施行については、拙稿「石門心学の展開と勸業理念の形成—第一期京都策の思想的背景」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第11号、2006年、107～52ページ)。
- (57) 滝沢馬琴「兎園小説」(日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第2期1、吉川弘文館、1973年、121～2ページ)。
- (58) 鈴木浩三『パンデミック VS. 江戸幕府』日経プレミアシリーズ、2020年、77～82ページ。
- (59) 安藤優一郎、前掲書、2020年、78～127ページ。
- (60) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第12巻、塙書房、1999年、68～9ページ。
- (61) 同上書、351～3ページ。
- (62) 吉田伸之「江戸町会所の性格と機能について—幕藩体制下における都市下層対策の構造と特質を考える1・2」(『史学雑誌』第82巻7・8号、1973年、56～72ページ、76～87ページ)；安藤優一郎「江戸町会所における围糶(玄米)の買入れ—寛政期米価政策の視点から」(『社会経済史学』、第63巻3号、1997年、378～98ページ)；越永至道「江戸町会所について—前近代の救済事業についての考察」(『教育研究』、第25号、2007年、17～23ページ)。
- (63) 菊池万雄「江戸時代におけるコレラ病の流行—寺院過去帳による実証」(『人文地理』、第30巻5合、1978年、447～61ページ)；野村裕江「江戸時代後期における京・江戸期のコレラ病の伝播」(『地理学報告』愛知教育大学地理学会、第79号、1994年、1～20ページ)。
- (64) 沼倉延幸「長崎養生所の設立をめぐる長崎奉行の施策と幕府評議—幕末期改革派官僚岡部長常の洋学導入」(『青山学院大学文学部紀要』、第28号、1986年、35～53ページ)；深澤恵・安武敦子・山下龍「19世紀の西洋の病院指針の比較による長崎小島養生所に関する計画史的研究」(『長崎大学大学院工学研究科研究報告』、第50巻94号、2020年、95～101ページ)。
- (65) 斎藤月峯著・金子光晴校訂『増訂 武江年表2』東洋文庫、1968年、168ページ。
- (66) 近世史研究会編『江戸町触集成』第17巻、塙書房、2002年、300～1ページ。
- (67) 那賀山章元『麻疹要論』、1799年(国立国会図書館デジタルコレクション)。
- (68) 白杉悦夫「庸医」(吉田忠ほか編『東と西の医療文化』思文閣出版、2001年)。  
川柳には藪医者どころか、それにも劣るタケノコ医者(筍では藪にもならない)まで登場する。小野眞孝『江戸の町医者』新潮選書、1997年、173～213ページ；氏家幹人『江戸の病』講談社選書メチエ、2009年、99～102ページ。江戸時代の医者養成については、海原亮『江戸時代の医師修業—学問・学統・遊学』吉川弘文館、2014年。

- (69) 大倉勝雲『麻疹一哈』、1778年（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）；鈴木則子、前掲論文、2004年、515～8ページ。
- (70) 安井廣迪「日本漢方諸学派の流れ」（『日本東洋醫學雑誌』、第58巻2号、2007年、177～202ページ）；山田光胤「日本漢方医学の伝承と系譜」（『日本東洋醫學雑誌』、第46巻4号、1996年、505～18ページ）。
- (71) 鈴木則子、前掲論文、2004年、528～31ページ。
- (72) 『麻疹必用』の情報の多くは、中国医書に求めることができる。
- (73) 加藤光男「文久二（一八六二）年の麻疹流行に伴う麻疹絵の出版とその位置づけ」（『文書館紀要（埼玉県立文書館）』、2002年、55～70ページ）。
- (74) 重田貞一『麻疹養生傳』、1824年（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- (75) 酒井シヅ、前掲書、2008年、238～49ページ。
- (76) 守屋毅『京の芸能—王朝から維新まで』中公新書、1979年；八木透『京のまつりと祈り—みやこの四季をめぐる民俗』昭和堂、2015年、17～56ページ；本多健一『京都の神社と祭り—千年都市における歴史と空間』中公新書、2015年、43～59ページ。
- (77) 香川雅信「疫病を遊ぶ—疱瘡神祭りと玩具」（小松和彦編『禍いの大衆文化—天災・疫病・怪異』KADOKAWA、2021年、59～89ページ）。
- (78) H・O・ローテルムンド『疱瘡神—江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』岩波書店、1995年、54～8ページ；氏家幹人『江戸の病』講談社選書メチエ、2009年、195～7ページ。
- (79) 疱瘡見舞いには、疱瘡絵の入った袋に赤い菓子を入れるという風習は、種痘を実施するようになってからも続いた。草川隆「疱瘡の話」（『民俗（相模民俗学会）』。第26号、7ページ）。また、疱瘡治療に赤色を用いる風習は、ヨーロッパや中国にもあったようである。藤浪剛一『日本衛生史』日新書院、1942年、108～9ページ；イヴ＝マリ・バルセ著／松平誠・小井高志監訳『鍋とランセット—民間信仰と予防医学1798-1830』新評論、1988年、234ページ。
- (80) 川部裕幸「疱瘡絵の文献的研究」（『日本研究（国際日本文化研究センター紀要）』、第21号、2000年、117～45ページ）。以下の疱瘡絵に関する記述は、この論文に多くを負っている。
- (81) H・O・ローテルムンド、前掲書、1995年、166～70ページ；酒井シヅ、前掲書、2008年、193～202ページ。
- (82) H・O・ローテルムンド、前掲書、1995年、127ページ。
- (83) 立川昭二『病いと人間の文化史』新潮選書、1984年、120ページ。
- (84) 近松半二ほか著・阪口弘之ほか校訂『太平記忠臣講釈』（叢書江戸文庫第39巻）国書刊行会、1996年、185～283ページ。
- (85) 中野操「疱瘡絵」（『錦絵医学民俗志』金原出版、1980年、74ページ）。

- (86) 畑有紀「幕末の麻疹と食—食物本草本を中心に」(『言葉と文化』、第12号、2011年、101～18ページ)。
- (87) 鈴木則子、前掲書、2012年、184～90ページ。
- (88) 加藤光男「文久2(1862)年の麻疹流行に伴う麻疹絵の出版とその位置づけ」(『文書館紀要』埼玉県立文書館、第15号、2002年、55～70ページ)。
- (89) 富澤達三「シンポジウム報告・論文「時事錦絵」としての鯰絵」(『史潮』、第50号、2001年、4～25ページ);富澤達三『錦絵のちから—幕末の時事的錦絵とかわら版』文生書院、2004年。
- (90) 天野信景『塩尻』(『日本随筆大成』新版第3期第14巻、吉川弘文館、1978年、235～6ページ)。
- (91) 式亭三馬「麻疹戯言」(式亭三馬著・棚橋正博校訂『式亭三馬集』国書刊行会、1992年、66～7ページ)。
- (92) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第5巻、塙書房、1996年、375ページ。
- (93) 富澤達三『錦絵のちから—幕末の時事的錦絵とかわら版』文生書院、2004年。
- (94) この傾向は現在もおお続いている。中村浩訳『全国厄除け郷土玩具—疫病退散! 入手先・由来・ご利益のすべてがわかる』誠文堂新光社、2020年。
- (95) 鈴木則子、前掲書、2012年、150～2ページ。
- (96) 橋本伯寿『国字断毒論』、1814年(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)。
- (97) 『新編武蔵風土記稿』、1884年(国立公文書館デジタルアーカイブ);三島政行『葛西志:東京地誌史料』地誌刊行会、1930年。
- (98) 津田十方庵敬順『十方庵遊歴雜記』(国立国会図書館デジタルコレクション)。
- (99) 西角井正大「願人坊主の芸能」(『日本歌謡研究』、第15巻、1975年、34～42ページ);吉田伸之『日本の歴史17成熟する江戸』講談社、2002年、151～94ページ。
- (100) 喜多川守貞・宇佐美英機校訂『近世風俗志:守貞謄稿(一)』岩波文庫、1996年、323～5ページ。
- (101) 鈴木明子「半田稲荷社の略縁起と願人坊主」(『宗教民俗研究』、第9号、1999年、33～49ページ);加藤貢「江戸市民と葛西金町村の半田稲荷」(『国立歴史民俗博物館研究報告』、第155集、2010年、59～85ページ)。
- (102) 多紀元堅『時還読我書』、1845年(国立国会図書館デジタルコレクション)。
- (103) 斎藤月岑著・金子光晴校訂『増訂 武江年表2』東洋文庫、1968年、190ページ。
- (104) 京都町触研究会編『京都町触集成』第12巻、岩波書店、1987年、403ページ。
- (105) 高橋敏「幕末民衆の恐怖と妄想—駿河国大宮町のコレラ騒動」(『国立歴史民俗博物館研究報告』、第108集、2003年、149～64ページ)。日本の花火大会のきっかけは、コレラなどの疫病の流行であるといわれている。打ち上げ花火によって、死者の慰霊と悪疫の退散を祈った、井奈波良一「打ち揚げ花火と健康」(『日本健康医学会雑誌』、第20巻4号、2012年、214～7ページ)。



- (106) これは死をイメージするケガレの世界からハレの祭りに転化したともみえる。  
高橋敏『江戸のコレラ騒動』角川ソフィア文庫、2020年、55～9ページ。
- (107) 同上書、199～9ページ。
- (108) 同上書、88～92ページ。
- (109) 高橋敏「安政5年のコレラと吉田神社の勧請—駿州駿東部下香貫村・深良村のコレラ騒動」(『国立歴史民俗博物館研究報告』、第109集、2004年、1～20ページ)。
- (110) 播本眞一「『怪物輿論』と『奇疾便覧』」(『国文学研究』、第115号、1995年、86～95ページ)。
- (111) 鈴木則子、前掲書、2012年、135～8ページ。以下の麻疹に関する印刷物についての記述は、この著書に多くを負っている。
- (112) 『麻疹御伽双紙』、1824年(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)。
- (113) 「何でも四文」の店は波銭(四文銭)を支払いの単位とする屋台であり、文化期(1804～1818年)の史料から登場する。原田信男編著『江戸の料理と食生活』小学館、2004年、119ページ。
- (114) 鈴木則子、前掲書、2012年、142～4ページ。
- (115) 同上書、146ページ。
- (116) 乍昔堂花守『麻疹せん語』、1824年、18～9ページ(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)。
- (117) 畑有紀「『麻疹太平記』と本草学—描かれた食物をめぐる」(『説話文学研究』、第49号、2014年、137～47ページ)。
- (118) ほとんどの麻疹絵は1862(文久2)年の麻疹流行時に江戸で発行されている。
- (119) 「麻疹能毒合戦図」、くすりの博物館のHP(人と薬のあゆみ・保健衛生・はしか・はしか絵)より。
- (120) 『麻疹流行雑記』(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)；鈴木則子、前掲書、2012年、178～80ページ。
- (121) 鈴木俊幸『江戸の本づくし』平凡社新書、2011年。
- (122) 鈴木則子、前掲書、2012年、180～4ページ。
- (123) 加藤武「鸚鵡石」(『悲劇喜劇』、第50巻2号、1997年、16～7ページ)。
- (124) 藤田洋『歌舞伎の事典—演目ガイド181選』新星出版社、2008年。
- (125) 高橋敏、前掲書、2020年、215～37ページ。以下の刷り物に関する記述は、この著書に多くを負っている。
- (126) 玩究隠士校正編著『道化災難 三十六歌仙八種—パロディ版百人一首叢書』アマゾン・Kindle本、2020年。
- (127) 三木清『三木清全集』第1巻、岩波書店、1966年、296～302ページ。
- (128) 永井荷風「日和下駄」(永井杜吉著『荷風全集』第11巻、岩波書店、1993年、135ページ)。

